改訂 女子新國文 巻十

46
810
昭1

42238
教科書文庫
4
810
42-1927
2000030
2000073459

資料室

文部省檢定濟

昭和二年一月十二日
高等女學校國語科用

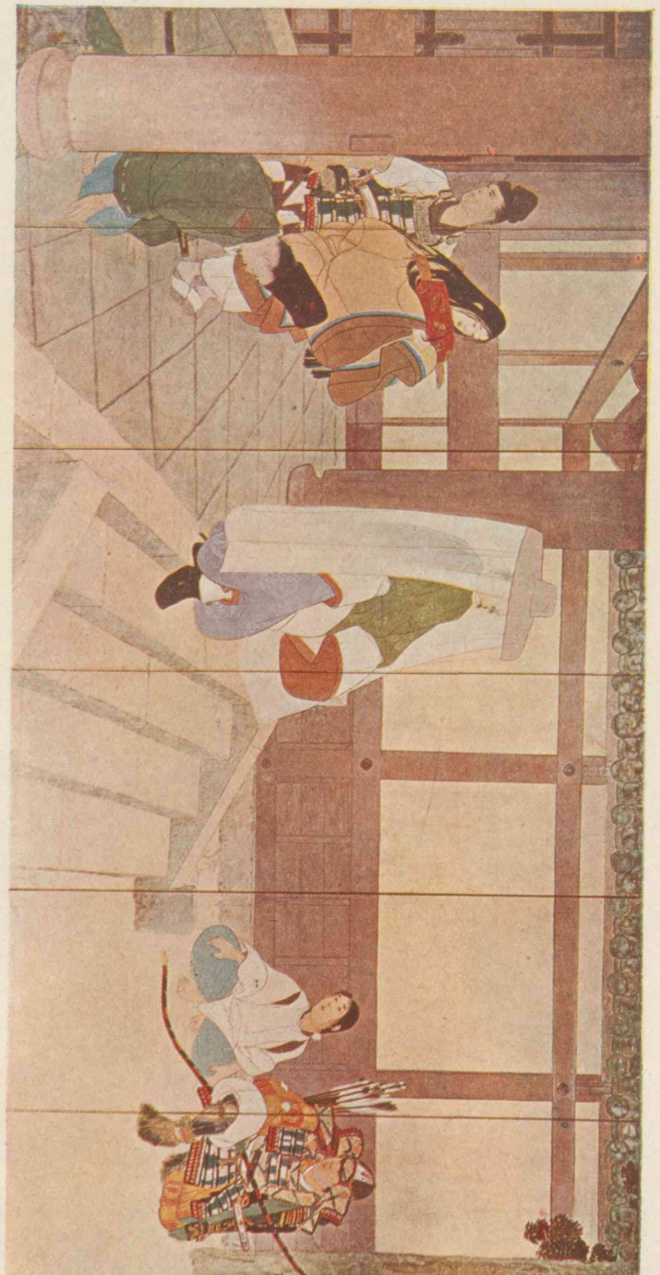
文學博士 芳賀矢一編

改訂 女子新國文

卷十

東京
合資會社 冨山房發兌

4b
810
昭1



二　神武天皇と後醍醐天皇

後醍醐天皇　橋本關雪筆

広島大学
教
73459
図書

改訂

女子新國文卷十目次

一 隅田川に寄する詞……島崎藤村……一
二 神武天皇と後醍醐天皇……幸田露伴……五
三 新葉集の歌(自修文)……大町桂月……一〇
四 熊野落その一……(太平記)……一四
五 熊野落その二……(太平記)……一八
六 樹の根……和辻哲郎……二三
七 草ばうき……永井荷風……二六
八 法成寺の造營……(榮華物語)……三三
九 光頼卿の參內その一……(平治物語)……三八
一〇 光頼卿の參內その二……(平治物語)……四一
一一 女子と歌……佐々木信綱……四五

一二　眞日のあゆみ（短歌新調その二）……四九
一三　自作の四季の歌（自修文）……與謝野晶子……五三
一四　新島守その一……（增　鏡）……五九
一五　新島守その二……（增　鏡）……六五
一六　生命の直感……相馬御風……七一
一七　眞夜中から黎明まで……豐島與志雄……七九
一八　臺所の經濟說……森本厚吉……八四
一九　上古の人の飲んだ酒と氷と牛乳（自修文）……木宮泰彥……九〇
二〇　天は煕き地は悅ぶ……中村孝也……九四
二一　春は曙……清少納言……一〇〇
二二　蟻通の明神……清少納言……一〇六
二三　清少納言の意氣……萩野由之……一一〇
二四　春秋の爭……津田左右吉……一一六

二五　都入……紀貫之……一二四
二六　一系の天子（俳句新調）……一二八
二七　生の象徵としての短詩……岩城準太郎……一三一
二八　萬葉集の歌……一三六
二九　民謠の話（自修文）……島木赤彥……一三九
三〇　四季小品……一四七
　一　春雨……中島廣足……一四七
　二　風鈴……香川景樹……一四八
　三　きぬた……清水濱臣……一四八
　四　秋の山田……藤井高尚……一四九
三一　古文學に見えた祖先の面影その一……五十嵐力……一四九
三二　古文學に見えた祖先の面影その二……五十嵐力……一五三
三三　日本文學……一五六

三四　一莖の花も風雨を凌がざれば咲かず(自修文)……小川未明…一六二

附錄

俳句百吟

甲　代表的で、價値もあるもの……一

乙　價値は低いが通俗に人氣あるもの……八

改訂 女子新國文巻十

一　隅田川に寄する詞

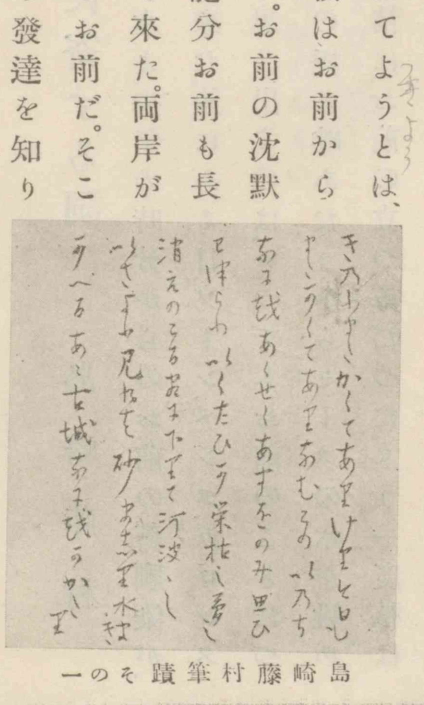
島崎藤村

流れよ、流れよ、隅田川の水よ。少年の時分からのお前の舊馴染が、またお前の懷裡へ歸つて來た。旅にある日、(一)ゾーン、(二)ベンヌ、(三)ガロンヌなどの河畔に立つて私が思ひ出すのは、いつでもお前のことだつた。パリの(四)オステルリッツの橋の畔あたりから、(五)セーヌの水を眺めた時にも、私の遠く迩る旅情は、お前の立つ方だつた。もう一度私はお前の岸に歸つて來て、お前の水を見得ることを喜ぶ。私が旅に出た時分から見ると、お前は一層默つてしまつたやうな氣もする。お前の聲はどうしたらう。いつまでお前はそのやうに沈默を續けて

(一)Saône. フランスの東部にある川。
(二)Vienne. フランスの西部にある川。
(三)Garonne フランスの南部にある川。
(四)Austerlitz.
(五)Seine.

きのふまたかくてありけり
今日もまたかくてありなむ
このいのちなにをあくせく
あすをのみ思ひわつらふ
いくたひか榮枯の夢の
消えのこる谷に下りて
河波のいさよふ見れは
砂ましり水まきかへる
あゝ古城なにをかかたり

ゐるのだらう。お前の河岸の變遷と工業化とに壓せられて、お前の白魚が死に、お前の都鳥が飛去つたやうに、お前の聲も涸れはてたのだらうか。遙かに川上の方から渦卷き流れてくるお前の水がある限り、お前の詩が涸れはてようとは、どうしても思はれない。私はお前から溢れてくる詩を知りたい。お前の沈默を破つた聲を聞きたい。隨分お前も長い目で岸の變遷を眺めて來た。兩岸が武藏野であつた昔からのお前だ。そこに建てられた大きな都の發達を知りつくして來たお前だ。舊兩國が一切の交通の中心で、用をたすにも、ものを運ぶにも、舟の便利に頼らなければならない時代からのお前だ。お前は驚くべき大改革を眼のあたりに見て來た。江戸の崩壞



島崎藤村筆蹟　その一

熾盛

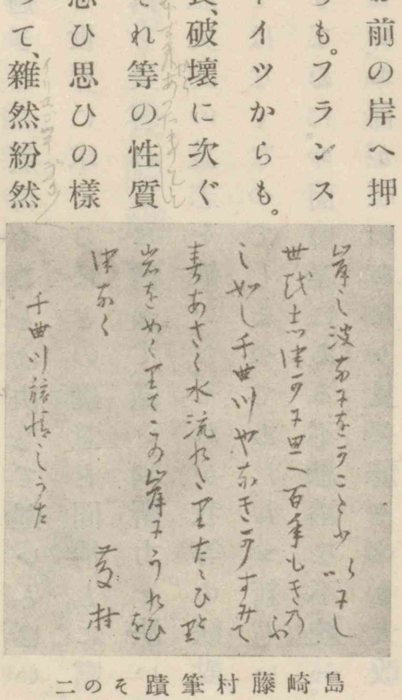
岸の波なにをかこたふ
いにし世をしつかに思へ
百年もきのふの如し
千曲川やなきかすみて
春あさく水流れたり
たひとり岩をめくりて
この岸にうれひをつなく

藤村
千曲川旅情のうた

確執

造形美術

を。政治の改變を。憲法の制定を。廣く知識を世界に求めようことを。世界のありとあらゆる所から採得る限りのものを採らうことを。これがお前の見た維新當時に於ける熾盛な精神ではなかつたか。新しいものがかくしてお前の岸へ押寄せて來た。アメリカからもフランスからも。イギリスからも。ドイツからも。そして、改良に次ぐに改良、破壞に次ぐに破壞を以てした結果、それ等の性質を異にしたものが、各自思ひ思ひの樣式と主張と確執とをもつて、雜然紛然たること、恰も植民地の町を見る如くにお前の兩側に移植された。時代の象徴とも見るべき造形美術、殊に建築を見わたすと、お前の岸にあつたものが餘りに温和しく、餘りに弱々しく、餘りに纖細で、



島崎藤村筆蹟　その二

新しく西洋から入つて來た組織的なものの爲に、なんとなく蹂躙されてしまふやうな氣がして、いたいたしくてならない。今になつてこの不調和を嘆くのは遲いかも知れない。しかし、我等日本人が、餘りにクラシック(一)を棄過ぎたと氣付くことは、決して遲いとはいへない。我等は廣く知識を世界に求めるほどの鋭意と同情とに富んでゐる。たゞ我等はそれを受容れるに當つて、強い判斷力を缺いた。言葉を換へていへば、歷史的の意志を缺いた。それが我等の缺點だ。我等は自己の支配者ではなくなつてしまつてゐた。たゞ新しいものの入つてくるに委せてゐた。お前の岸にある不思議な不統一。私はそれをお前に問ひたい。お前が眼のあたり見た驚くべき大改革は、人の心に「推移」をばもたらしたらうか。しかしながら、人の心の奧に「改革」をもたらしたらうか。それを思ふと、私はいひ難い幻滅の悲哀に打たれる。お前はセーヌでもなく、テームスでもなく、やはり一

(一)Classic.（古典）

幻滅の悲哀

番親みの深い隅田川だ。往昔、多情多感な詩人(一)が嘴の紅い都鳥を見て、妻の生死をたづねた歌をお前に殘した。それほど古い歷史のあるお前だ。私は若いお前を夢みつゝ、それを賴りにして、遠い旅から歸つて來た。なんとなくお前の水はまだ薄暗い。太陽の光線はまだお前の岸に照りわたつてゐないやうな氣がする。お前の日の出が見たい。

——海——

二　神武天皇と後醍醐天皇

幸田露伴

申すもいと畏けれど、わが邦創業の帝神武天皇、孔舍衙坂(二)の戰に御兄君五瀨命を敵の矢の爲に失ひ給ひて、甚だしく御憤懣あらせられ、誓つて長髓彥(三)に天誅を加へんとし給ひし御時は、いかに勇猛壯烈に大御心の思し給ひしがまゝを、御製に述べ給ひしぞや。

(一)在原業平。

(二)たゞこえ 直越ともいふ。河内國中河内郡から生駒山を越えて大和國生駒郡生駒村に至る坂路。

憤懣

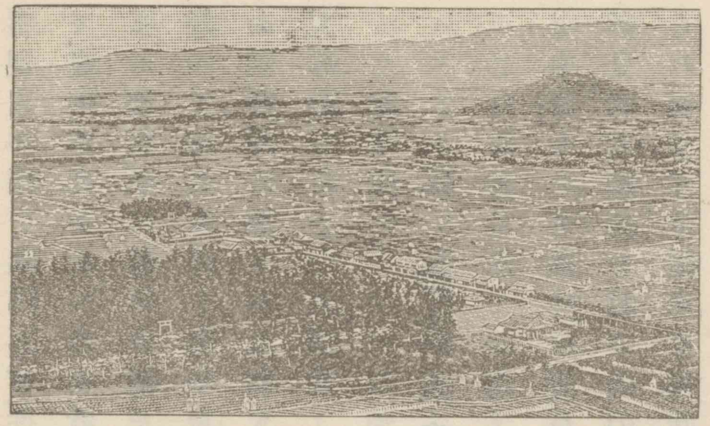
(三)大和國鳥見の酋長。一名登美毘古。

みつみつし久米の子等が
粟生には、かみら一もと、
そねがもと、そねめつなぎて、
撃ちてしやまん。

と謠ひ給ひ、また

みつみつし來目の子等が
垣本に、植ゑしはじかみ
口ひゞく。我はわすれじ、
撃ちてしやまん。

と謠ひ給へる御威勢の烈しき、御心の猛々しき「韮を食へば餘味ここにありて、わが口ここに疼む。わが兄すでに撃たれぬ。わが心なほ痛む。忘れんや。忘れんや。おのれ醜虜、撃ち屠らではいかで



神武天皇陵

か止まん。」と御目に觸れし韮に御情を寄せ給ひて、御言葉のあやをなし出で給へる、いさぎよしなんど申すも畏き御製なり。

建武中興の帝後醍醐天皇は、これはた申すも畏けれど、英明にわたらせ給ひし御門なり。されどその御製の御心御姿は、世の異なるが爲もあるべけれど、いたく神武天皇のとはさま異なり。

秋ごとのならひと思ひし露しぐれ
ことしは袖の上にぞありける

と詠じ給へる、

まだなれぬ板屋の軒のむら時雨
おとを聞くにもぬるゝ袖かな

とあそばされたる、臣子の分としては、わが日の本の皇帝のかゝる御詠ありしかと思へば恐れながら御痛はしさに涙はふり落ち、かかる御製を御詠ありたるその世いと恨めしく口惜し。

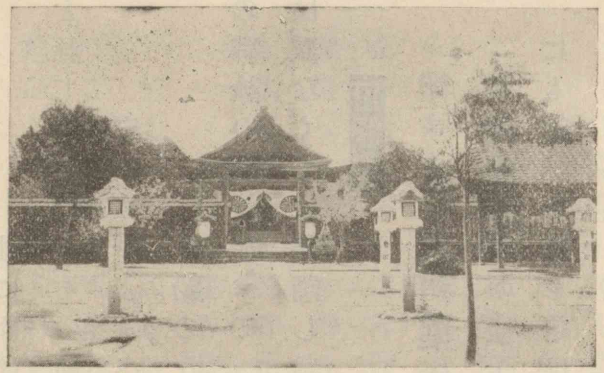
埋るゝ身をば歎かずなべて世の
　くもるぞつらきけさの初雪
の御製は、大御心の深く廣き、おろかなる身にも大凡は推量り奉られて、これまた涙とゞめあへず。

　身にかへて思ふとだにも知らせばや
　　たみのこゝろのをさめがたさを
の御製は、聖意いと畏く、恐多き極みの御詠なり。

　もの思はで過ぎぬる方の年月は
　　いかに寢し夜の夢にかあるらん
と懷舊の情を詠み給ひたる、吉野の行宮にていかなるをりにか、
　あだに散る花をおもひの種として
　　この世にとめぬこゝろなりけり
と感慨し給ひたる、同じ行宮にて御風邪めしたる時、

扈從

　つゆの身を草の枕におきながら
　　風にはよもと頼むはかなさ
と詠じ給ひたる、御扈從の人々うち續き身まかりける時、
　こと問はん人さへ稀になりにけり
　　わが世の末のほどぞ知らるゝ
と御心細くものし給ひたる、吉野にて世尊寺の邊の雲居の櫻と名に呼ばれたるが咲きたるを御覽じて、


吉野神宮

　ここにても雲居の櫻咲きにけり
　　たゞかりそめの宿とおもふに
と無限の御恨を、いと優しくいひ出で給ひたる、同じ行宮にて、

　ふしわびぬ霜寒き夜の床はあれて
　　袖にはげしき山おろしのかぜ

と詠じ給ひたる、その他船上山(一)にて名和長年(二)に賜ひたる

　忘れめやよるべも波のあら磯を
　　み船のうへにとめしこゝろは

の御詠の如き、なべて一天萬乘の御製とし思へば、臣子の分としては、涙なくては拜誦し參らせ難き御製多し。

——讕言——

自修文

三　新葉集の歌

大町桂月

後醍醐天皇の皇子宗良(三)親王、歌に堪能なり。將軍として戰ふ際にも吟詠を廢し給はず。元弘以來弘和元年までの名歌を撰びて、「新葉和歌集」と題しけるに、長慶天皇これを勅撰(四)に準じ給へり。新葉集はかゝる次第にてできたれば、隨つて吉野山に關するあはれなる歌も少からざるなり。

(一)鳥取縣東伯郡赤崎の南三里。
(二)姓は源氏。初の名は長高。伯耆名和の人。
(三)初め出家して尊澄といひ、天台の座主であつた。還俗して宗良と改め、中務卿征東將軍として朝敵征討の軍に從はれた。
元弘云々　後醍醐天皇の元弘元年から長慶天皇の弘和元年まで五十一年間。
(四)醍醐天皇が勅して古今和歌集を撰せしめられてから新續古今集まで勅撰和歌集はすべて二十一ある。

　ここにても雲居の櫻咲きにけり
　　たゞかりそめの宿とおもふに

これ後醍醐天皇の御製なり。吉野の世尊寺に「雲居の櫻」と稱する櫻あり。雲居は禁中をいふ。さらでだに舊禁中のこひしくして堪へ給はざるに、吉野山中「雲居」と稱する櫻を御覽じては、豈叡感無量ならざるを得んや。悲しいかな、かりそめの御宿つひの御宿となりて、延元陵(一)畔、永へに游人をして涙襟をうるほさしむ。

　吉野山花も時得て咲きにけり
　　みやこのつとに今やかざらん

これ後村上天皇の御製なり。山櫻を土産にして京都に還らせ給ひし時の御うれしさはさぞと思はるれど、やがてまた京都を保ち給ふこと能はずして、再び吉野に赴かせ給ひし時の御失望やいかなりけん。

つひの御宿　最後の御宿。
(一)後醍醐天皇の陵。吉野塔尾に在る。延元は天皇治世の年號。
游人　旅人。

花に云々　花となじみになつた春はどれほどであらうか。もはや長い間ここに春を迎へた。

(一)後村上天皇の女御。

わが宿と頼まずながら吉野山
花に馴れぬる春もいくとせ

これ長慶天皇の御製なり。後醍醐天皇の皇子、吉野の山中に人となり給ひけん。父祖の御遺志を嗣ぎ給はんの御志切なれども、事終に御志とかなはざりき。されど知らず、京都は果して御心にかなひたる御宿なりしか。この天皇の御母を(一)嘉喜門院と申しまつる。その歌に、

櫻花さきて疾く散る習こそ
わが身の春のもの思なれ

きのふは紅顔、けふは白頭、人生の老いやすきは、男子とても悲歎に堪へざるに、まして女性の御身、櫻花の散りやすきさまを見給ひて、いかに御身をはかなく思し給ひけん。

故里はこひしくともみ吉野の
はなの盛をいかが見すてん

御製　長慶天皇の御歌。

そのかみ　その當時の意。ここでは後村上天皇御在世中のこと。峰の松風に往時を思ひだされたのである。

御返し　御返歌のこと。普通に返歌は、しといひ、文には返りといふ。

これ新葉集の撰者なる宗良親王の歌なり。詩人の雅懷を見る。されど散らばまたいかに都のこひしかるらん。嘉喜門院は歌を善くし給ふのみならず、最も琵琶に長じ給へり。されど後村上天皇崩御の後は、悲哀に堪へず、誓って琵琶を彈き給はざりき。然るに天授三年七月七日、吉野の行宮にて樂をとり給ひけるが、樂終りて後長慶天皇、門院に向かひて、一曲を切に乞ひ給ひければ、門院も恩愛の情にほだされて、琵琶を彈き給ふ。その時の御製に、

かくてのみ絶えず聞かばやそのかみの
秋おもほゆる峰のまつかぜ

昔は父天皇この琵琶を聽きて、御心を慰め給ひけん。父天皇今はおはせず、母君の琵琶が亡き父天皇の形見なり。門院の御返しに、

あはれとも君ぞ聽きける今ははや
ふきたえぬべき峰のまつかぜ

唱和　互に詩や歌で問答すること。
(一)後醍醐天皇の第三皇子護良親王。延暦寺の大塔に居られたので大塔宮といふ。
(二)奈良市外にある。
(三)元弘元年九月二十八日。
虎の尾を履む恐
長夜に迷ふ
うづらの床

「わが餘命いくばくもなし。君が昔をしのぶといふ琵琶の音も、やがて聽き給ふに由なかるべし。」となり。二首いづれも意あはれにして、詞も妙なり。宗良親王これを評して、古の勅撰集中の唱和に比して、毫も遜色なしとて、これを新葉集に收め給へり。

―作文五十講―

四　熊野落　その一

(一)大塔宮二品親王は笠置の城の安否を聞し召されん爲に、暫く南都の(二)般若寺に忍びて御座ありけるが、笠置の城すでに(三)落ちて、主上囚はれさせ給ひぬと聞えしかば、虎の尾を履む恐御身の上に迫りて、天地廣しと雖も御身を隱さるべき所なく、日月明らかなりと雖も長夜に迷へる心地して、晝は野原の草に隱れて、露に臥すうづらの床に御涙を爭ひ、夜は孤村の辻にたゝずみて、人を咎むる里の犬に御心を惱まされ、いづことても御心安かるべき所なかりければ、かくても暫しはと思し召されけるところに、(一)一乘院の候人按察法眼好專、いかにして聞きたりけん、五百餘騎を率ゐて、未明に般若寺へぞ寄せたりける。

をりふし、宮につき奉りたる人一人もなかりければ、一防防ぎて落ちさせ給ふべきやうもなかりける上、透間もなく兵すでに寺内にうち入りたれば、紛れて御出あるべき方もなし。「さらばよし自害せん。」と思し召して、すでにおしはだ脱がせ給ひたりけるが、「事かなはざらん期に臨んで腹を切らんことはいと易かるべし。もしやと隱れて見ばや。」と思し召しかへして、佛

般若寺樓門

(一)奈良興福寺の北にあつた同寺の末寺の一。

これ體

殿の方を御覽ずるに、人の讀みかけて置きたる大般若の唐櫃三つあり。二つの櫃はいまだ蓋をあけず、一つの櫃は御經を半ばすぎ取出して、蓋をもせざりけり。この蓋をあけたる櫃の中へ、御身を縮めて伏させ給ひ、その上に御經をひきかづきて、隱形(おんぎやう)の呪を御心の中に唱へてぞおはしける。もし捜し出されなば、やがて突立てんと思し召して、氷の如くなる刃をぬいて御腹にさし當て、兵「ここにこそ。」といはんずる一言を待たせ給ひける御心の中、推量るもなほ淺かるべし。

さるほどに兵佛殿に亂れ入りて、佛壇の下、天井の上までも殘る所なく捜しけるが、餘りに索めかねて「これ體のものこそ怪しけれ。あの大般若の櫃をあけて見よ。」とて、蓋したる櫃二つをあけて御經を取出し、底を翻して見けれどもおはせず。「蓋あけたる櫃は見るまでもなし。」とて、兵皆寺中を出去りぬ。宮は不思議の御命をつがせ給ひ、夢に道行く心地して、なほ櫃の中におはしけるが、若しまた兵の立歸り委しく捜すこともやあらんずらんと御思案ありて、やがて前に兵の捜し見たりつる櫃に入りかはらせ給ひてぞおはしける。案の如く、兵どもまた佛殿に立歸り、「前に蓋のあきたるを見ざりつるがおぼつかなし。」とて、御經を皆うち移して見けるが、からからとうち笑ひて、「大般若の櫃の中をよくよく捜したれば、大塔の宮はいらせ給はで、大唐の玄弉(一)三藏こそおはしけれ。」と戲れければ、兵皆一同に笑ひて門外へぞ出でにける。これ偏に摩利支天の冥應、または十六善神の擁護による命なりと信心肝に銘じ、感涙御袖を濕せり。

かくては南都邊の御隱所(おんかくれが)もかなひ難ければ、即ち般若寺を御出でありて、熊野(二)の方へぞ落ちさせ給ひける。御供の衆には光林坊玄尊、(三)赤松律師則祐、木寺相模岡本三河坊、武藏坊村上(四)彥四郎、片岡八郎、

夢に道行く心地

(一)支那唐代の高僧。印度に入り大部の經文を持ち歸り、まそれを漢譯した。（西暦六〇二年―六六四年）

冥應

信心肝に銘ず

(二)紀伊國牟婁郡をひろく熊野といふ。

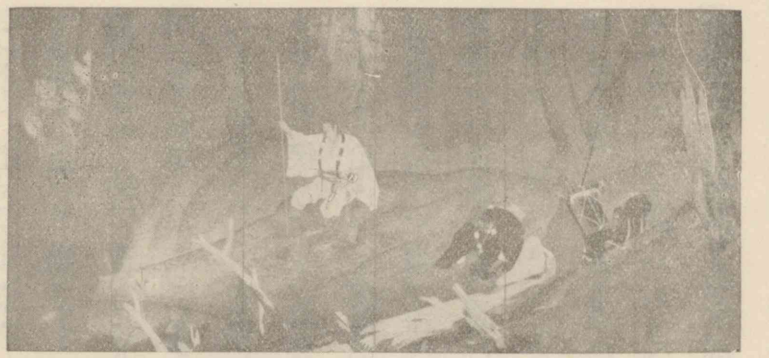
(三)則村の第三子。延暦寺の律師。初め護良親王に從ひ、後尊氏の叛に與した。

(四)義光。信濃の人。元弘三年（一九九三年）吉野城の陷らうとする時大塔宮の身代になつた。

柿の衣

龍樓鳳闕

華軒香車



護良親王の熊野落（磯田長秋筆）その一

矢田彦七、平賀三郎彼此以上九人なり。宮を始め奉りて、御供のものまでも皆柿の衣に笈を掛け、頭巾眉半ばにせめ、その中に年長ぜるを先達に作り立て、田舎山伏の熊野參詣する體にぞ見せたりける。

五　熊野落　その二

この君もとより龍樓鳳闕の内に人とならせ給ひて、華軒香車の外を出でさせ給はぬ御事なれば、御歩行の長途は定めてかなはせ給はじと、御供の人々かねては心苦しく思ひけるに、案に相違して、いつ習はせ給ひたる御事ならねども、怪しげなる單皮、脚

（草臥）

勤修

(一)紀伊國日高郡にもあり、ここは淡路國津名郡。和歌山對岸の港。

濱ゆふ

(二)紀伊國海草郡。

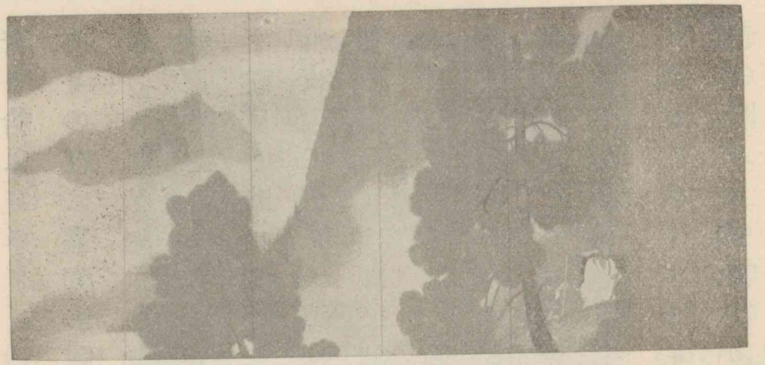
(三)海草郡和歌の浦。

(四)(五)共に同所附近。

長汀曲浦

雨を含める孤村の樹夕べを送る遠寺の鐘

(六)日高郡。今切目神社といふ。熊野大神の末社である。



護良親王の熊野落（磯田長秋筆）その二

巾、草鞋を召して、少しもくたびれたる御氣色もなく、社々の奉幣、宿々の御勤、おこたらせ給はざりければ、路次に行逢ひける道者も、勤修を積める先達も、見咎むることなかりけり。

(一)由良の湊を見わたせば、沖漕ぐ舟の楫緒絶え、浦の濱ゆふいく重とも、知らぬ浪路に鳴く千鳥、紀の路の遠山渺々と、薄紫や(二)藤代の松にかゝれる磯の浪、(三)和歌(四)吹上をよそに見て、月に磨ける(五)玉津島、光も今はさらでだに、長汀曲浦の旅の路、心を碎くならひなるに、雨を含める孤村の樹、夕べを送る遠寺の鐘、哀をもよほす時しもあれ、(六)切目の王子に

御袖を片敷く

(一)東牟婁郡。三山は本宮、新宮、那智。

(二)大和國吉野郡。熊野川の上流。

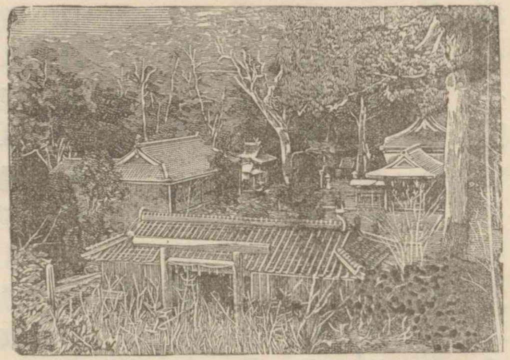
着き給ふ。

その夜は叢祠の露に御袖を片敷きて、夜もすがら祈り申させ給ひけり。丹誠無二の御勤、感應などかあらざらんと、神慮も暗に測られたり。夜もすがらの禮拜に御窮屈ありければ、御肱を曲げて枕として、暫く御まどろみありける御夢に、びんづら結ひたる童子一人來て、(一)熊野三山の間はなほも人の心不和にして、大義成りがたし。これより(二)十津川の方へ御わたり候ひて、

高峰の雲に枕をそばだつ

岩漏る水に渇を忍ぶ

時の到らんを御待ち候へかし。兩所權現より案内者に附けまゐらせられて候へば、御道指南仕るべく候。」と申すと御覽ぜられて、御夢は即ち覺めにけり。これ權現の御告なりけりと、たのもしく思し召されければ、未明に御よろこびの奉幣を捧げ、やがて十津川をたづねてぞ分入らせ給ひける。



切目神社

その道のほど三十餘里が間には、絶えて人里もなかりければ、或は高峰の雲に枕をそばだてて、苔のむしろに袖を敷き、或は岩漏る水に渇を忍びて、朽ちたる橋に肝を消す。山路もとより雨なうして、空翠常に衣を濕す。見上ぐれば萬仞の青壁劍に削り、見おろせば千丈の碧潭藍に染めり。數日の間かゝる嶮難を經させ給へば、御身もく

たびれはてて、流るゝ汗水の如く、御足は缺損じて、草鞋血に染まれり。御供の人々もその身鐵石にあらざれば、皆饑疲れて、はかばかしくも歩み得ざりけれども、御腰を推し、御手を引いて、路のほど十三日に、十津川にぞ着かせ給ひける。

—太平記—

六　樹の根

和辻哲郎

一

松の樹に圍まれた家の中に住んでゐても松の樹の根が地中でどうなつてゐるかは、餘り考へて見たことがなかつた。美しい赤褐色の幹や、わりに色の淺い清らかな綠の葉が、長い馴染である松の樹の全體であるやうな氣持がしてゐた。雨がふると、幹の色はしつとりと落着いた潤のある鮮かさを見せる。綠の葉は淚にぬれたやうな、しをらしい色艶を増してくる。雨のあとで太陽が輝きだすと、

生の喜

早朝のやゝな爽かな氣分が、樹の色や光のうちに漂うて、いかにも朗かな生の喜がそこに躍つてゐるやうに感ぜられる。をりふしかはいゝ小鳥の群が、生き生きした聲でさへづり交して、綠の葉の間を樂しさうに行ききする。それが私の親しい松の樹であつた。

然るに或時、私は松の樹の生育つた小高い砂山を崩してゐる所にたゝずんで、砂の中にくひこんだ複雜な根を見まもることができた。地上と地下との姿が、なんとひどく相違してゐることだらう。一本の幹と、簡素に並んだ枝と、樂しさうに葉先をそろへた針葉と、それに比べて地下の根は、戰ひ、もがき苦しみ、精一杯の努力を盡したやうに、枝から枝と分れて、亂れた女の髮の如く、地上の枝幹の總量よりも多いと思はれる太い根、細い根の無數を以て、一齊に大地に抱きついてゐる。私はこのやうな根が地下にあることを知つてはゐた。しかし、それを目の前にまざまざと見た時には、思はず驚異

の感に打たれぬわけには行かなかつた。私は長い馴染の間に、このやうな地下の苦みが、不斷に彼等にあることを、一度も自分の心臓で感じたことがなかつたのである。彼の苦みの聲を聞いたのは、時をりに吹く烈風の際であつた。彼の苦しさうな顔を見たのは、濕りのない炎熱の日が、一月以上も續いた後であつた。しかし、その叫聲や、萎れた顔も、その機會さへ過ぎれば、すぐに元の快活にかへつて、苦みの痕をめつたにあとに遺さない。しかも彼等は私たちの眼に秘められた地下の營を、一日も怠つたことがないのであつた。あの美しい幹も、葉も、五月の風に吹かれて飛ぶ緑の花粉も、實はこのやうな苦勞の上にのみ可能なのであつた。

この時以來、私は松の樹のみならず、あらゆる植物に心から親みを感ずるやうになつた。彼等は私どもと共に生きてゐるのである。それは誰でも知つてゐることだが、私には新しい事實としか思は

沒頭す　地殼

れなかつた。

二

成長を欲するものはまづ根を確かにおろさなくてはならぬ。上に伸びることを欲するな。まづ下にくひいることに努めよ。

三

早年にして成長のとまる人がある。根をおろそかにしたからである。四十に近づいて急に美しい花を開き、豊かな果實を結ぶ人がある。下にくひいることに沒頭してゐたからである。

私の知人にも、理解のいい頭と感激の強い心臓と、よく立つ筆とを持ちながら、まるで勞作を發表しようとしない人がある。彼は今生きることの苦しさに壓倒されて、自分のやうなものは生きる値打もないとさへ思つてゐる。しかし、それは彼の根が一つの地殼に突當つて、それを突破する努力に惱んでゐるからである。やがてそ

墮す

の突破が實現された時に、どのやうな飛躍が彼の上に起るか。私は彼の前途を信じてゐる。根の確かな人から貧弱な果實が生まれるはずはない。

四

古來の偉人には、雄大な根の營があつた。その故に彼等の仕事は、味はへば味はふほど、深い味はひを示してくる。

現代には、たとひ根に對する注意が缺けてゐないにしても、ともすれば、それが小さい植木鉢のなかの仕事に墮してゐはしないか。いかにすれば珍しい變種ができるだらうかとか、いかにすれば豫定の時日の間に注文通りの果實を結ぶだらうかとか、すべてが餘りに人工的である。限られた土壤の中で纖細に發達した根は、深い大地に移されても、自由にその手足を伸すことができない。天を突かうとするやうな大きな願望は、いぢけた根からは生まれるはずがない。

偉大なものに對する崇敬は、また偉大な根に對する崇敬であることを考へて見なければならぬ。

五

教養は培養である。それが有効である爲には、まづ生活の大地にくひいらうとする根がなくてはならぬ。

人々は餘りに根の本能を忘れてゐはしないか。いかに貴い肥料が加へられても、それを吸收する力のない所では、なんの役にも立たない。私は教養の機會と材料とが、私たちの前に乏しいとは思はない。たゞそれに相當する根が小さいのを恐れる。

汝の根に注意を集めよ。

——偶像再興——

白日

（梔子）

（落霜紅）

（槇）

（扇骨木）

七　草ばうき

永井荷風

白日門を閉ぢて獨り閑庭に飛花落葉を掃ふ時の心ほど、我ながら懐かしきはなし。

飛花は春に限らず、落葉また獨り秋のみならんや。山茶花の落つる時、冬漸く寒く、八つ手の花雪ならぬ雪を降らせば、くちなしの實、うめもどきと共に愈〻赤し。梅、櫻、桃、李のながめ、きのふと過ぎ、垣には卯の花の雪積りて、藤棚のかげに紫の房もやうやう落ちつくせば、雀の子すでに巣立して、あたりは夏なり。五月、松の花は閑庭の苔に金砂を撒き、七月、石榴の花は綠陰に緋の毛氈をのぶ。

落葉は新樹の綠潮の如く湧出づる時より、庭の隅々、垣の際に掃盡せぬばかり堆し。これ去年一冬の霜を忍びし椎、樫、まき、かなめの如き常磐木の古葉、若芽の伸ぶるに隨ひ、風をも待たで落散るなり。

春盡きんとして雨多く、世には流行風邪の噂もありて、一重の小袖俄に薄寒き夕暮など、かゝる常磐木の落葉窓の障子にはらはらと音づるれば、心は忽ち時雨の夕に異ならず、思はずとものことども、何くれとなく思ひ出さる。

かなめの古葉の落ちんとする時、秋の楓の如く紅となり、青葉に交りてちらほら花の如く目立ちて見ゆる風情あり。竹の落葉に夏の暑さは漸く烈しく、樫、椎の古葉は土用に入りてもなほ散りやまず。とかくするうち早くも秋立ちて、芭蕉の葉破れ、桐の葉落つ。

桐の一葉に秋を知るとは誰もいふことなれど、桐よりも早く散落つるは梅、櫻の葉なるべし。桐の中にても碧梧の如きは、十月の半ばその葉黄ばみて、なほ枝上に留るを見ること珍しからず。

柳も梧葉、荷葉、芭蕉と共に秋には脆きものの中に數へられたれど、初冬十一月、山茶花もはや咲出でんとするに、御堀の柳を見れば、

青き葉なほ落ちつくさざることあり。

年中の景物、およそ首夏の新樹と晩秋の黄葉といづれをか選ぶべき。この時節両つながら夕陽甚だ美なり。一は密葉の間を染めて友禪の如く、一は黄葉に映じて錦繍の如し。然れども新緑は花にも似て束の間の眺なり。その軟かき緑は長からず。梅雨晴の日の光漸く強くなり行くに隨ひ緑は黒ずみて、終に盛夏の塵を浴ぶ。やがていつともなく朝夕の寒さ身にしみ來れば、風うち騷ぐ梢のいたゞきより、木の葉はその緑漸く黄ばみ出して、次第に日蔭の小枝にも及ぶほどに、初に色變へし木の葉、まづひらひらと閃き落つ。

去年の秋より冬へかけて、われ人なき庭にたゞ一人落葉掃きつつ、木々の梢の色變り行くさま仔細にうち眺め、徒然の餘り手帳に控へ置きけり。春より夏にかけて若芽、青葉の緑、木々により濃淡强弱さまざまに湧出づるを、若し西洋の音樂に譬へて、緑の管絃樂と

(槐)

(槲)

も名づけ得たらんには、憔悴の詩情いひ難き黄葉の管絃樂は、まづ十月よりその序曲を奏で出づるなり。

梅、櫻は盛夏の候早く病葉の黄ばみ落つること多けれど、そは數へざるべし。後の彼岸に殘暑も今は全く去りぬる夕、碧梧、とち、ゑんじゆの葉はいつしかうち黄ばみたり。わが庭に一樹の木蘭あり。木蘭は人その花をのみ愛づれども、黄葉またなかなか棄難し。樫の高き梢に百舌啼叫ぶ十月となるや、大きさかしはの如き木蘭の葉は、淡くほのかに黄ばみ出づ。その色、曇りし日の夕まぐれ、夜将に來らんとする境には、白く影の如くに浮立つさま、はかなくもまたあはれなり。さても十一月となり、冬愈、迫り來れば、色淡き黄葉は次第に褐色となるより早く枝を去るなり。

萩もわれ花のみならで、枯行く葉をも愛づ。十月半ばより萩の葉は黄ばむと共に散りかけて、十一月に至れば、一葉をも留めず、凋落

まことに早し。これに比ぶれば、秋草の中にて葉鷄頭の十一月半ば菊花盛の頃まで衰へながら立ちすくみたる、潯陽江頭琵琶に泣く棄婦の心にも喩へつべし。

藤棚に藤の葉の淺く黄ばみたるも趣あり。臘梅の黄葉は黄昏の微光を得て哀いと深く、さいかちの細き葉は落花に異ならず、えのきの落葉はそゞろに驛路の鈴響く街道の夕べを思はしむ。これ皆十一月の光景にして、この月柿の葉紅に染まり、つたの葉また赤し。

楓葉は菊花と並びて可憐の秋をなすことといはずもあれ、公孫樹の黄葉また初冬十一月の美しき眺をつくる。ここに石榴の黄葉看來れば、その美敢へて公孫樹に劣るものならず。石榴の葉は柳の如く細きが、晩風に誘はれて、紛々として雨の如く散落つるや滿地皆黄色となり、短き日の暮れつくして、常磐木の木蔭いち早く暗くなり行くに、石榴の葉散敷く所のみ長く暮れやらねば、月の光照添へるかと疑はる。この葉、池の水に散積りて朽ちたる藻を蔽へば、いづれか水、いづれか岸とも見えわかず。敗荷、殘柳と相俟つて、蕭條たる池邊の廢趣愈深し。

楓葉は蓋し搖落の殿をなすものなり。菊花凋みつくして、臘梅のつぼみ點々數へ來らんとする時、常磐木の蔭に木枯をよけては、極月なほ楓葉の枝にあるを見ることとあり。されど冬至に及びてあらゆる樹木愈、葉なきに至れば、菊は早くその切株に新緑の芽を生じ、水仙の葉また三四寸も伸びて、春風を待てり。園居年々景物相同じ。然れども看來つて常に興新たなれば、草木のよく人を幸ならしむること、蓋し黄金にも優れりといふべきか。

——荷風全集——

(一)法成寺。寛仁三年（一六七九年）道長の創建。址は今の京都御所の東隣。

八　法成寺の造營

今は御心地例ざまになりはてさせ給ひぬれば、(一)御堂のこと思し

御堂關白
松岡映丘筆

急がせ給ふ。攝政殿(一)、國々までさるべき公事をばさるものにて、まづこの御堂のことを先につかうまつるべき仰言宣ふ。殿(二)の御前も、「このたび生きたるは別事ならず、わが願のかなふべきなめり。」と宣はせて、他事なくたゞ御堂におはします。方四町をこめて大垣にして、瓦ふきたり。さまざまに思しおきて急がせ給へば、夜の明くるも心もとなく、日の暮るゝも口惜しう思されて、夜もすがらは、山をたゝむべきやう、池を掘るべきさま、木を栽ゑなめさせ、さるべき御堂御堂、方々さまざま造りつゞけ、御佛はなべてのさまにやはおはします。丈六の金色の佛を、數も知らず造りなめ、そなたをば北南と馬(め)道(たう)をあけて、道をとゝのへ造らせ給ひて、廊、渡殿數多く造らせ給ふに、鷄の鳴くも久しく思され、宵、曉の御行も怠らず、安きいも、大とのごもらず、たゞこの御堂のことのみ深く御心にしませ給へり。

日々に多くの人々參り罷で立ちこむ。さるべき殿ばらをはじめ

(一)藤原賴通。道長の子。世に宇治殿といふ。承保元年(一〇七四年)薨。年八十三。

(二)藤原道長。

大とのごもる

御封
御庄
地子官物
（木賊）
（椋）

奉りて、宮々の御封、御庄どもより、一日に五六百人千人の夫どもを奉るにも、人の數多かることをば、かしこきことに思したち、國々の守ども、地子官物はおそなはれども、たゞ今はこの御堂の夫役、材木、檜皮、瓦など多く參らすることを、我も我もと競ひつかうまつる。大方近きも遠きも參りこみて、品々方々、あたりあたりにつかうまつる。

或所を見れば、御佛つかうまつるとて、佛師ども百人許並みゐてつかうまつる。同じくは、これこそめでたけれと見ゆ。御堂の上を見上ぐれば、工匠ども二三百人のぼりゐて、大きなる木どもには太き綱をつけて、聲を合はせて、えさまさと引上げさわぐ。御堂の中を見れば、佛の御座作りかゞやかす。板敷を見れば、とくさ、むくの葉などして、四五十人手毎に並みゐて磨き拭ふ。檜皮ぶき、壁塗、瓦作なども數をつくしたり。また年老いたる翁などの、三尺許の石を、心に任せ

(一)釋迦在世時代の富豪。蘇達多ともいふ。

棟木（尾竹竹坡筆）その一

て切りとゝのふるもあり。池を掘るとて四五百人おりたち、山を疊むとて五六百人のぼりたち、また大路の方を見れば、力車にえもいはぬ大木どもに綱をつけて、叫びのゝしり引きもてのぼるあり。賀茂川の方を見れば、いかだといふものに、くれ、材木を入れて、棹さして心地よげに謠ひのゝしりてもてのぼるめり。磐石といふばかりの石を、はかなきいかだに載せて牽てくれど沈まず。すべていろいろさまざま、いひつくしまねびやるべき方なし。かの(一)須達長者の祇園精舍造りけんも、かくやありけんと見ゆるを、冬の室、夏の風、各ことごとなり。

棟木（尾竹竹坡筆）その二

かゝる御勢にそへて、入道せさせ給ひて後は、いとど勝らせ給へりと見えさせ給ふにも、なほなべてならざりける御有樣かなと、近う見奉る人は尊み、遠う見奉る人は、遙かに拜みまゐらす。今はこの御堂のあたりの木草ともならんと思へる人のみ多かり。そなたざまに赴けば、海の浪もやはらかにたちて、この御堂のものをもて運ばせ、河も水澄みて、快く浮かべもて參ると見ゆ。なほなべてこの世のこととは見えさせ給はず。まづは、先年に長谷寺にある僧の、御祈禱をいみじうして寝たりける夢に、大きにいかめしき男の出で來て、「何かかく殿の御事を

ばともかくも申し給ふ。弘法大師の佛法興隆の爲に生まれ給へるなり。」とぞ見えさせ給ひける。また天王寺の聖德太子の御日記には、「王城より東に、佛法弘めん人を我と知れ。」とこそは書置かせ給ふなれ。いづれにても、おろかならぬ御事なり。

——榮華物語——

九　光頼卿の參內　その一

さるほどに、內裏には同じき十九日、公卿僉議とて催されけり。勸修寺左衞門督光頼卿、このほどは信頼卿のふるまひ過分なりとて、不參にておはしましけるが、參內して承らんとて、殊に鮮かに束帶ひき繕ひ、蒔繪の細太刀をおとなしやかに佩き給ひ、乳母子の桂右馬允範能に、膚に腹巻着せ、雜色の裝束に出立たせ、「自然の事もあらば人手にかくな。汝が手にかけて光頼が首をば急ぎ取れ。」とて、御身近く置き、その外、清げなる雜色四五人召具して、大軍陣を張りてところどころ門々を堅く守護しけるを事ともせず、先高らかに追はせて入り給へば、兵どもも大いに恐れ奉り、弓を平め、矢をそばめて通し奉る。

束帶圖

紫宸殿の後を經て殿上を廻りて見給へば、信頼卿一座して、その座の上﨟たち皆下にぞ着かれたる。光頼卿、「こは不思議のことかな。人はいかにふるまふとも、彼は右衞門督、我は左衞門督なれば下には着くまじきものを。」と思はれければ、左大辨宰相長方卿、末座の宰相にておはしましけるに、「けふの御座席こそよにしどけなう見え候へ。」と色代して、しづしづと歩み信頼卿の上にむ

(一)二條天皇の平治元年十二月。
(二)顯頼の子。承安三年(一八三三年)歿。年五十。
(三)藤原信頼。忠隆の子。清盛に六條河原で殺された。年二十七。
(四)不詳。
過分
自然の事

(一)顯長の子。建久三年(一八五二年)薨。年五十三。
しどけなし
色代す

ずと着き給ふ。光賴卿は信賴卿の爲には母方の叔父なる上、大力の剛の人なれば、殊に恐れて見えられけり。右の袖の上に居懸けられて、伏目になりて色を失はれければ、着座の公卿あなあさましと見給ふに、光賴卿下襲のしり引直し、衣紋繕ひ笏とり直し、氣色して、「けふは衛府督が一座すると見えて候。召に參ぜざらんものをば、死罪に行はるべしとやらん承りて、參內するところなり。抑、何事の御諚ぞ。」と問ひけれども、信賴卿ものも宣はず、着座の公卿も一言の返答なかりければ、まして僉議のさたもなし。ほど經て光賴卿つい立ちて、「悪しう參つて候ひけり。」とて、しづしづと歩み出でられけり。

庭上に充ち滿ちたる兵どもこれを見奉りて、「あはれこの殿は大剛の人かな。去んぬる十日より多くの人出仕し給ひつれども、右衛門督殿の座上に着く人一人もおはしまさざりつるに、しいだしたることよ。門を入り給ふより、聊かも臆したる體も見え給はず。あはれこの人を大將として合戰せば、いかばかりかたのもしからん。」と申せば、傍なるもの「昔、賴光(一)、賴信(二)とて源氏の名將おはしましき。その賴光をうち返して光賴と名のり給へば、これも剛にましますぞかし。」といへば、また傍より「など、その賴信をうち返して信賴と附き給ふ右衛門督殿は、あれほど臆病にはおはしますぞ。」といへば、「壁に耳、天に口といふことあり。恐し、恐し、聞かじ。」といひながら、皆忍笑ひに笑ひけり。

一〇　光賴卿の參內　その二

光賴卿かやうにふるまひ給へども、急ぎても出でられず。殿上の小じとみの前、見參の板高らかに踏鳴らして立たれたりけるが、荒海の障子の北、萩の戶の邊に、弟の別當惟方(三)のおはしけるを招き寄せて宣ひけるは、「公卿僉議とて催されつる間參じたれども、承り定

(一)源滿仲の子。治安元年(一六八一年)歿。
(二)賴光の弟。永承三年(一七〇八年)歿。年八十一。
(三)左兵衛督檢非違使別當藤原惟方。

(一)少納言藤原通憲入道信西。平治元年(一八一九年)歿。

先蹤

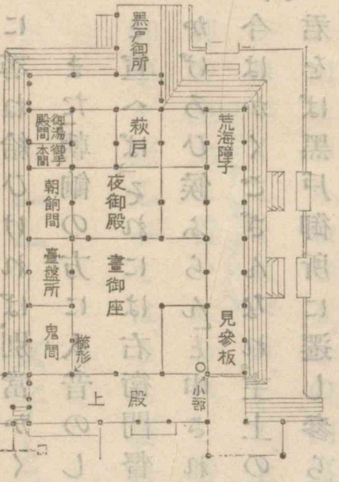
(二)藤原高藤。昌泰三年(一五六〇年)歿。年六十三。

(三)高藤の子定方。承平二年(一五九二年)薨。年六十。

めたることもなし。誠やらん、光頼も死罪に行はるべき人數にてあなる。傳へ承る如きは、その人皆當時の有職然るべき人どもなり。そのうちに入らんこと甚だ面目なるべし。さても先日、右衛門督が車の尻に乘つて、(一)少納言入道が首實檢の爲に神樂岡へ向けられけることはいかに。以ての外然るべからざるふるまひかな。近衛大將檢非違使別當は他に異なる重職なり。その職にゐながら、人の車の尻に乘り給ふこと、先蹤も未だ聞及ばず、當時も大いに耻辱なり。就中、首實檢は甚だ穩便ならず。」と宣へば、別當「それは天氣にて候ひしかば。」とて赤面せられけり。

光頼卿重ねて「こはいかに勅諚なればとて、いかで存ずる旨を一議申さざるべき。我等が曩祖(二)勸修寺內大臣、(三)三條右大臣、延喜の聖代に仕へてより以來、君すでに十九代、臣また十一代、承り行ふことは皆これ德政なり、一度も惡事に從はず。當家はさせる英雄にはあら

ざれども偏に有道の臣に伴なうて、讒佞の輩に與せざりし故に、昔より今に至るまで、人にさしもどかるゝほどのことはなかりしに、御邊始めて暴惡の臣に語らはれて、累家の佳名を失はんこと口惜しかるべし。大貳清盛は熊野參詣を遂げずして、切目の宿より馳上るなるが、和泉、紀伊國、伊賀、伊勢の家人等待受けて、大勢にてあなる。信賴卿が語らふところの兵そこばくならじ。平家の大勢押寄せて攻めんには、時刻をやめぐらすべき。若しまた火などをかけなば、君もいかでか安穩にわたらせ給ふべき。灰燼の地となりたらんだにも、朝家の御歎なるべし。いかに況んや君臣共に自然の事もあらば、天下の珍事、王道の滅亡、この時にあるべきをや。右



(一)後白河上皇。

かげろふ

のろのろしげ

衛門督は御邊に大小事を申しあはすとこそ聞ゆれ。相構へて相構へて隙を窺ひ、玉體恙なくおはしますやうに思案せらるべし。さて主上はいづくにおはしますぞ。」「黑戸御所に。」(一)「上皇は。」「一本御書所に。」「內侍所は。」「温明殿に。」「劔璽は何處に。」「夜の大殿に。」と、左衛門督次第に尋ね給ひければ、別當かくぞ答へられける。

また「朝餉の方に人音のし、櫛形の穴に人影のしつるは何ものぞ。」と宣へば、「それには右衛門督住み候へば、その方ざまの女房などぞかげろひ候ふらん」と申されければ、光賴卿聞きもあへず、「世の中は今はかくござんなれ。主上のわたらせ給ふべき朝餉には信賴住み、君をば黑戸御所に遷し參らせたなり。末代なれども、さすがに日月は未だ地に落ち給はぬものを。天照大神、正八幡宮は王法をいかが守り給ひぬるぞ。異國にはかやうの例ありと雖も、わが朝には未だかくの如き先蹤を聞かず。前代未聞の不思議かな。」とて、のろのろし

宿業

げに憚るところなく口說き給へば、惟方は人もや聞くらんと、よにすさまじげにて立たれたれども、かつは悲しくて、「我いかなる宿業によつてかゝる世に生まれ合ひ、憂きことをのみ見聞くらん。昔の許由にあらねども、今の內裏の有樣を聞かん輩は、耳をも口をも洗ひぬべくこそはべれ。」とて、上の衣の袖絞るばかり泣かれけり。信賴卿の座上に着かせられし時は、さしもゆゝしく見え給ひしが、君の御事を悲しみてはうち萎れてぞ出で給ひける。

——平治物語——

二　女子と歌

佐々木信綱

み空に星の光なく、地上に花の色香なくば、いかにこの世は寂しからん。人に歌といふものなくば、いかに人の世は寂しからん。星の光をつめたしとは誰かいふらん。花の色をはかなしとは誰かいふらん。その花の麗しき姿にうち向かふ一時ぞ、塵の世の塵の思も忘

あくがる

うつし世

くしく妙なる

(一)伊勢の人。嘉永二年（二五〇九年）歿。年六十九。

なべての人

られて、人は神にぞ近づくなる。その遠き星の光にあくがるゝ時ぞ、人はこのうつし世のはかなきかりそめのものならぬことをも知りえて、行末遠く想をぞ馳するなる。かくてぞ人は清められ、人は高めらるゝなる。まして、くしくしく妙なる人の心の輝きては星よりも清く、咲きては花よりも麗しき歌といふものばかり尊きものはあらざらん。されば近世の國學者橘守部(一)が、人の心を樂器にたとへて、歌詠まぬ人の心を鳴らぬ琴、音せぬ笛の如しといひけん如く、誠に星輝き花咲く世にそを麗しと感じ、あはれと思ふ心もてる人にして、歌詠まざらんばかり、口惜しきはあらざらん。

こはなべての人にわたりていへることにて、もとより男女と別ちいふべきにあらねども、これをわが國の歌といふものにつきて見るに、あるは國語の性質、あるはそのさゝやかなる詩形などの故にや、優しく細かき情をのぶるにふさはしければ、もとも女子に適したりとやいふべからん。さればまた歌學ぶことによりて、かりそめに見過しゝ雲のたゝずまひ、草木のさまなど、天地のさまざまの姿にも心とまるやうになり、悲しき樂しきくさぐさの人の世のことわざにも心動きて、女子が本來の麗しきさがを養ひ得るよすがともなるなり。されば歌詠むことは、また女の身に學ばではかなはぬ業といふべし。

深きあはれ妙なる趣

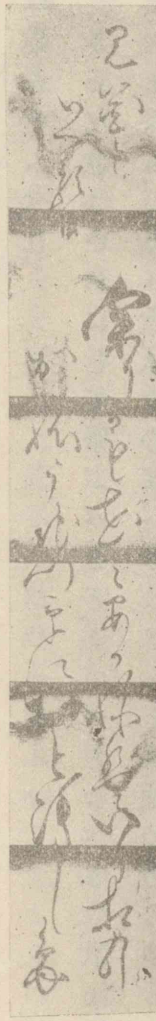
さらば歌はいかにして學ぶべきぞ。まづつとむべきは、歌よむ心ばへを養ふにあり。歌詠む心ばへとはなんぞ。天地のあらゆることより、人の世の業の何につけても、あだに見過さで、到る所に深きあはれ、妙なる趣を心をこめて見とむることとなり。この心ばへこそ歌詠むに最も必要なることならめ。これだに養ひ得たらんには、その言葉につらね、句に綴り出づる業に於ては、あるは師につくも可、書によるも可。自ら多くよみ試み、古今の勝れし歌をたえず詠み味は

(一)正親町三條實同の女。慶應二年(二五二六年)歿。年八十四。

(二)見花といへるを
余りにも花にあかねはいり相のかねうちつけにおとろかしけり

ふに於ては、女子の自らの優しくこまやかなる性は、これと共に養はれ、これと共にあらはれ出でて、星の光の如く清く、花の色の如く麗しき歌詠みいでんこと難からじ。

終りにいさゝか、近世の勝れし女流歌人の上をいふべし。その數あまたある中に、殊に勝れたるは太田垣蓮月、野村望東及び(一)柳原安子の三人なり。蓮月は若くして夫を失ひ、尼となりて清き生涯を送りし人にして、家集に海士の刈藻及び蓮月歌集あり。望東は維新の際の女丈夫にして、家集に向陵集及び姫島日記あり。安子は柳原均光卿の夫人、その家集に月桂一葉と桂芳院遺草とあり。三人の歌いづれもとりどりの特色あれども、一言にいはば、蓮月の歌は清く、望



柳原安子筆蹟

つき〳〵にまき葉ほぐれていろさすか芭蕉のみとりつねあたらしき 翠子

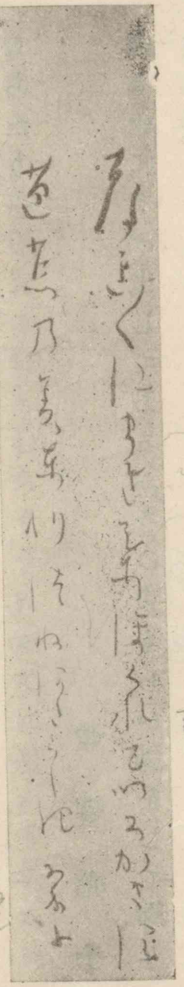
東のは雄々しく、安子のは才氣こもれり。いづれもその人となりの表れたるもおもしろく、しかもその中にひとしく女らしき優しさぞこもれる。これ等いづれも女子が歌詠み習ふ上に模範として學ぶべきものなり。

——竹柏集——

一二 眞日のあゆみ

杉浦翠子

あまづたふ眞日のあゆみをけふもまた山に入るまで全けく見し



杉浦翠子筆蹟

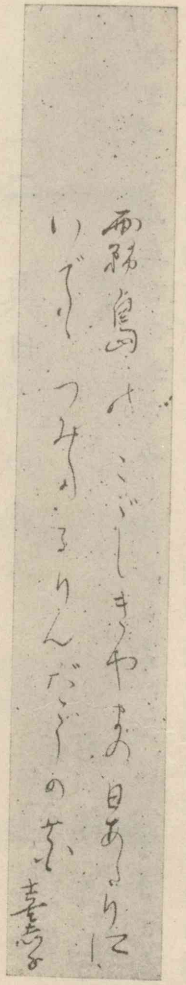
三ヶ島葭子

あこがもつもやひの傘にわがぬれず買物もみなあこがもちたり

四賀光子

板じきになげ出してあるふきの束もらひ湯をして歸り來にけり

霧島のこゞしきやまの日あたりにいでゝつみたるりんだうの花　喜志子



若山喜志子筆蹟

湯げむりは峰にわく雲とまがひつゝこるとしもなくなびきのぼれり

若山喜志子

しんとして動かぬ白帆ひとつあり小暗くなぎしけ前

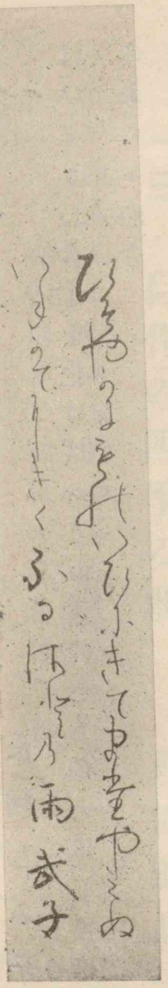
岡本かの子

の海

すてられてなほ咲く花のあはれさにまたとりあげて水あたへけり

九條武子

ひそやかにものいひにきてまたやみぬいねかてにきくふるさとの雨　武子



九條武子筆蹟

山杉のしづくにぬれてはしきやし人をまつがに鳥なくをまつ

矢澤孝子

比叡の山冬きたる日もむらさきにあでに若かりいたゞきのいろ

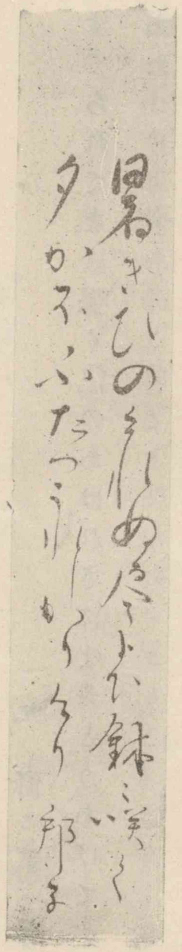
茅野雅子

暑きひのくれぬる今よひ鉢に咲く夕かほふたつうれしかりけり　邦子

やちまたに人らいそげり夕ぐれて歸らぬ人をわが立ちまつに　栗原潔子

わが手まきて眠るまなごがほのかなる息のけはひの胸のべにすも　中河幹子

はひよりし吾子を抱けばかさね着のきものとほしてほのあたゝかき　長岡とみ子



山田邦子筆蹟

山田邦子

ほぐ　いはふ。

やすらけく心足れりとあらなくにおだやかにしてけふもすぎけり

自修文

一三　自作の四季の歌

與謝野晶子

かの人もこの人も皆あらたまれ　春のはじめにほぐことはこれ

私が年の初に祝つて述べる言葉は外にない。どの人も皆新しくおなりなさいといふことだけだ。人の心が新しくならねば、年ばかり改つてもなんにもならぬ。

天地の薄墨のいろ春くれば　ちりも餘さず朱に變りゆく

冬は宇宙を薄墨色に塗つてゐたが、あゝ春だ、春が來たのだ、さう思ふと、天地の間にあるものは、すべて眞赤な色に變つて行く

おほろか　心もちのさつぱりとして、おほやうなこと。

豐滿平和　十分に滿ちたりて、おだやかであること。

大自然　人間の力で測り知ることのできないこの大きな宇宙。

やうな氣がする。一片の塵までが華やかな色を帶びてゐる。

木の下に殘れる雪の青むなり
はるの土ともそれをいはまし

木蔭に消えのこる二月の雪が、ほんのりと好い綠を帶びてゐる。雪でなく、それも美しい春の土の一種だといひたいくらゐである。

おほろかにここを樂土となす如き
白木蓮の高きひともと

寛宏な心を持つて、この世界を最上な安樂淨土として樂しんでゐるやうに、白い木蓮の花が高々と盛上つて一本咲いてゐる。なんといふ豐滿平和な花であらう。

この世をば誰もめでたきわが世ぞと
おもはぬはなき花の下かな

豐麗な櫻は人間と同じく不可思議な大自然から生まれたも

精神的に云々　ここでは花も人間もこの世にできた精神の上から考へれば、ともに同等で一つものであるとの意。

人は花の云々　いつはりかざらぬ花の眞實の美しさを眞に見ることができて、始めて人間自身の眞實を知ることができるのである。

本質　うまれつき。

叡智　さとく、あきらか。

のである。精神的に考へると、花も人も平等一體のものである。人は花の眞實によつて人間自身の眞實を觀ることができる。何人も花の前に來て、この世界を自分の爲にある美しい高貴な世界であると感じないものはないであらう。

夏くればすべて目をあく鏡見て
ひとに勝るとするもこれより

生きる力の旺盛な夏の季節がくると、萬物が皆本質に持つてゐる叡智の眼を自ら開く。さうして、自分自身の尊嚴と美とを覺る。例へば、女が鏡に對して、自分の美が他人より優れてゐるといふやうな自信を起すのも、この季節からである。作者は「夏」といふものを、かういふ風に、新しい、力強い宇宙の力の象徴であると感じてゐる。

人間のいとなつかしき汗の香も
まじへて白き薔薇の花さく

人間　人全體をさす。或個人をいふのではない。

黄金の云々　第一句に雨殘るといつた、その雨は黄金のしづくの雨であると繰返していつたのである。

芳烈な香を立てて、白い薔薇が咲きだした。その香は私の懐かしく思ふ人間の汗の香までが混つてゐるやうな氣のする香である。私はこの人間性を持つてゐる、薔薇の花を特にうれしく思ふ。

やゝ寒し風にまじりて飛行機の
　おとの聞ゆる白き朝かな

初秋の曉の感じが白く清々しい中に、また少し寒い氣もする。さうして、風が輕く吹いてゐる。その風にまじつて、今空を通つて行く飛行機の發動機の爆音が快く聞える。

雨殘る黄金のしづくの雨殘る
　このたそがれの秋の世界に

秋のむら雨の晴れたあとの夕暮の快さ。日光の美しく照らす中に、天にも地にもまだ黄金の雨のしづくが暫く殘つてゐる。さわやかにしつとりとぬれないところもない。

劫初より作りいとなむ殿堂にわれもこかねの釘ひとつ打つ　晶子

はしけやし　かはいらしく思ふ。いとほしく思ふ。

陽曆　太陽曆のこと、即ち今普通に用ひてゐるこよみ。

氣高く云々　けだかくすみとほつた感じ。

母となりなほ懐かしむ千代紙の
　たぐひと見ゆる紅萩の花

母となつても、私にはまだ小娘のやうに美しい千代紙などをうれしいものに思ふ心が殘つてゐる。私がこの頃咲く紅萩の花を愛するのも、それが千代紙と同じ氣持を起させるからである。

與謝野晶子筆蹟

はしけやし白き孔雀を傍に
　おく心地する中ごろの秋

陽曆の十月、秋の半ばの氣高く澄徹した感じは純白な孔雀を自分の側に侍らせてゐるやうに快い。

秋風や白き小舟にたゞ一人
　ありてたゞよふ心地こそすれ

秋の季節の中にある自分は、白く塗つた小さい舟にたゞ一人乗つて、大海の中を漂流してゐるやうに、清く快い中に限り知らぬ心細さが感ぜられるのである。

しろがねの箔(はく)の屏風の古びゆく
ごとくに秋の冬になりゆく

秋の末から冬に移る印象は、鮮かに冷たい光を持つて氣高く輝いてゐた銀の新しい屏風が、次第に光を内に潜めて、嚴肅な冷たさと、上品に落ちついた趣とを增しながら、古くなつて行くやうな感じがする。

冬きたり近き木立もわが軒も
きはめて高く思はるゝかな

冬になつてから、近い所にある木立も、自分の家の軒までも、なんだか非常に高くなつた氣がして眺められる。木の葉が落ちつくして軒を壓するものがなく、空が露骨(ろこつ)に見すかされるせいで

でもあらうか。寒いので自然に身も心も低く屈む氣味があるせいでもあらうか。とにかくこんな氣持がするのである。

つゝましき冬の心に手をのべぬ
ともにあそべと朝のあられは

今朝降つた霰は、私の靜かな心を少し興奮させてくれた。私の冬の寂しい心に向かつて「共に遊ばう。一緒に踊らう。」といつて、手を差出すのであつた。私の心は暫くの間その霰と共に快く踊つた。

—晶子歌話—

一四　新島守　その一

四月(一)二十日帝(二)おりさせ給ひ春宮(三)四つにならせ給ふに讓り申させ給ふ。近頃皆この御齡にて受禪ありつれば、これもめでたき御行末ならんかし。同じき二十三日院號の定めありて、今おりさせ給へ

(一)承久三年。
(二)順德天皇。
(三)仲恭天皇。
受禪

(一)土御門院。
(二)後鳥羽院。
(三)近衛基通の子。
(四)後京極良經の子。
(五)當時の將軍賴經。鎌倉にゐた。
(六)後鳥羽院。
(七)鎌倉幕府方。
(八)佐藤朝光の子。承久三年(一八八一年)歿。
かつがつ　御勘事
(九)北條義時。
たなびかす

るを新院と聞ゆれば、御兄の院(一)をば中の院と申し、父帝(二)をば本院とぞ聞えさする。このほどは家實(三)の大臣關白にておはしつれど、御讓位の時道家(四)の大臣攝政になり給ふ。かの東の若君(五)の御父なり。

さても院(六)の思し構ふること忍ぶとすれどやうやう漏聞えて、ひがしざま(七)にもその心遣すべかめり。東の代官にて伊賀の判官光季(八)といふものあり。かつがつ彼を御勘事の由仰せらるれば、身方に參るつはものども押寄せたるに、遁るべきやうなくて、腹切りてけり。まづいとめでたしとぞ院は思し召しける。

東にもいみじうあわてさわぐ。さるべくて身の失すべき時にこそあなれと思ふものから、討手の攻來りなん時に、はかなきさまにて屍を暴さじ。おほやけと聞ゆとも、みづからし給ふことならねば、かつはわが(九)身の宿世をも見るばかりと思ひなりて、弟の時房と泰時といふ一男と二人を頭として、雲霞の兵をたなびかせて都にの

うしろめたき　心

ぼす。泰時を前に据ゑていふやう、「おのれをこのたび都に參らすることは、思ふところ多し。本意の如く清き死をすべし。人にうしろ見えなんには、親の顏また見るべからず。今を限りと思へ。賤しけれども義時、君の御爲にうしろめたき心やはある。されば横ざまの死をせんことはあるべからず。心を猛く思へ。おのれうち勝つものならば、二たびこの足柄、箱根山は越ゆべし。」など、泣く泣くいひきかす。まことにしかなり。また親の顏拜まんこともいと危しと思ひて、泰時も鎧の袖をしぼる。かたみに今や限りとあはれに心細げなり。

後鳥羽天皇

とばかり
かしこまりを申す

かくてうち出でぬるまたの日、思ひかけぬほどに、泰時たゞ一人鞭をあげて馳來たり。父胸うち騒ぎて「いかに。」と問ふに、「軍のあるべきやう、大方の掟などは仰の如くその心を得はべりぬ。若し道のほとりにも、はからざるに忝く鳳輦を先立てて、御旗をあげられ、臨幸の嚴重なることもはべらんに參りあへらば、その時の進退いかがはべるべからん。この一ことをたづね申さんとて、一人馳歸りはべりき。」といふ。義時とばかりうち案じて「賢くも問へるをのこかな。その事なり。正に君の御輿に向かひて弓を引くことはいかがあらん。さばかりの時は冑を脱ぎ、弓の弦を切りて、ひとへにかしこまりを申して、身を任せ奉るべし。さはあらで、君は都におはしましながら、軍兵を賜はせば、命を捨てて、千人が一人になるまでも戰ふべし。」といひもはてぬに、急ぎ立ちにけり。

都にも思しまうけつることなれば、もののふども召集へ、宇治、勢多の橋も引かせて、かたきを防ぐべき用意心ことなり。公經の大將(一)一人のみなん、御うまごのこともさることにて(二)、北の方、一條中納言(三)能保といふ人のむすめなり。その母北の方は、故大將(四)のはらからなれば、一方ならず東を重く思して、さしいらへもせず、院の御心の輕きことゝあぶながり給ふ。七條院(五)の御ゆかりの殿ばら、坊門大納言忠信、尾張中將清經、中御門大納言宗行、また修明門院(六)の御はらからの甲斐宰相中將範茂など、つぎつぎ數多聞ゆれど、さのみは記し難し。いくさにまじり立つ人々、この外の上達部にも殿上人にも數多ありき。

中の院はあかで位をすべり給ひしより、言にいでてこそものし給はねど、世のいと心やましきまゝに、かやうの御さわぎにも、殊に交らひ給はざめり。新院は同じ御心にて、よろづ軍のことなども、おきて仰せられたり。

(一)藤原氏。西園寺家の祖。
(二)將軍頼經のこと。頼經は公經の女の出である。
(三)藤原通重の子。建久九年（一八五八年）薨。年五十一。
(四)頼朝をいふ。
(五)藤原殖子。後鳥羽院の御母。
(六)藤原重子。順徳院の御母。文永元年（一九二四年）薨。御年八十八。

上達部
すべる

龍馬

いつの年よりも五月雨はれ間なくて、富士川、天龍などえもいはず漲りさわぎて、いかなる龍馬もうち渡し難ければ、攻上る武者どもも怪しく惱めり。かゝれども遂に都に近づくよし聞ゆれば、君の御武者も出でたつ。その勢六萬餘騎とかや。宇治、勢多へ分ち遣す。世の中ひゞき罵るさま、言の葉も及ばず、まねび難し。あるは深き山へにげ籠り、遠き世界に落下り、すべて安げなく騷ぎ滿ちたり。いかがあらんと君も御心亂れて、思し惑ふ。かねては猛く見えし人々も、まことの際になりぬれば、いと心あわたゞしく色を失ひたるさまども、たのもしげなし。六月十日あまりにや、いくばくの戰だになくて、遂に身方の軍破れぬ。荒磯に高潮などのさしくるやうにて、泰時と時房と亂れ入りぬれば、いはん方なくあきれて、上下たゞものにぞ當り惑ふ。

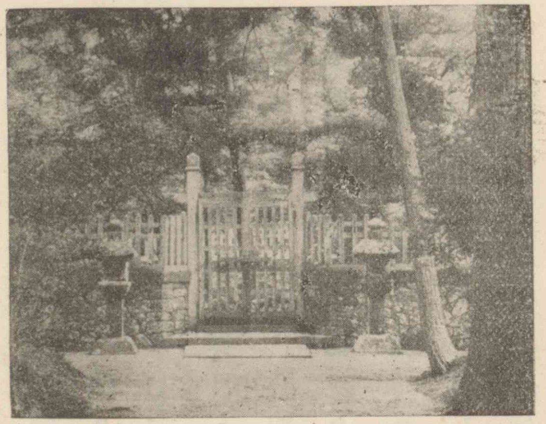
(一)山城國紀伊郡鳥羽にあつた離宮。

けふを限りの御ありき

(二)「とりかへすものにもがなや世の中をありしながらのわが身と思はん。」(源氏物語河海抄)

(三)藤原信實。有名な畫家。文永二年(一九二五年)歿。年七十。

一五　新島守　その二



佐渡國眞野陵（順德天皇陵）

東よりいひおこするまゝに、かの二人の大將軍謀らひおきてつつ、保元の例にや、院の上、都の外に遷し奉るべしと聞ゆれば、女院、宮々、ところどころに思し惑ふことさらなり。本院は隱岐國におはしますべければ、まづ鳥羽殿(一)へ網代車の怪しげなるにて、七月六日いらせ給ふ。けふを限りの御ありき、あさましうあはれなり。(二)ものにもがなや。」と思さるゝもかひなし。その日やがて御ぐしおろす。御年四十に一つ二つや餘らせ給ふらん、まだいと惜しかるべき御ほどなり。信實朝臣(三)召して、御姿寫し書かせらる。七條の院へ奉らせ給はんとなり。か

(一)秦の第三世子嬰のこと。始皇の孫。在位四十六日で沛公に降り秦は滅びた。

御心もて

(二)土佐國の西南幡多郡。

(三)後嵯峨天皇。

くて同じ十三日に御舟に奉りて、遙かなる波路を凌ぎおはします御心地、この世の同じ御身とも思されず。いみじういかなりける代代の報にかと恨めし。新院も佐渡國に遷らせ給ふ。まことや七月九日みかどをもおろし奉りき。この四月かとよ、御讓位とてめでたかりしに、夢のやうなり。七十餘日にており給へる例も、これや始なるらん。「唐土にぞ(一)四十五日とかや位におはする例ありける。」とぞ、唐の文讀みし人のいひし心地する。それもかやうの亂やありけん。さて上達部、殿上人、それより下、はた殘りなくこのことに觸れにしたぐひは、重く輕く罪に當るさま、いみじげなり。

中の院は初よりしろしめさぬことなれば、東にも咎め申さねど、父の院遙かに遷らせ給ひぬるに、長閑にて都にあらんこと、いと恐ありと思されて、御心もてその年閏十月十日、土佐國の(二)幡多(はた)といふ所にわたらせ給ひぬ。去年のきさらぎばかりにや、(三)若宮いでき給へり。

(一)土御門天皇の御母在子。

せうと

(二)源通子。

北面の下臈

召次

わりなきこと

(三)同年閏十月。

うたて

(一)承明門院の御せうとに、通宗の宰相中將とて、若くて失せ給ひし人のむすめの(二)御腹なり。やがてかの宰相の弟に通方といふ人の家に留め奉り給ひて、近くさぶらひける北面の下臈一人、召次などばかりぞ御供つかうまつりける。いと怪しき御手輿にて下らせ給ふ。道すがら雪かきくらし、風吹きあれ、ふゞきして、來し方行く先も見えず、いと堪難きに、御袖もいたく凍りて、わりなきこと多かるに、

　　憂世にはかゝれとてこそうまれけめことわり知らぬわがなみだかな

「せめて近きほどに。」と東より奏したりければ、(三)後には阿波國に遷らせ給ひにき。

さてもこのたび世の有樣、げにいとうたて口惜しきわざなり。あるは「父の王を失ふ例だに一萬八千人までありけり。」とこそ佛も說き給ひためれ。まして世下りて後、唐土にも日の本にも、國を爭ひて

よせ

きざみ

むけ

(一)藤原純友。朱雀天皇の天慶四年(一六〇一年)誅せられた。

(二)源義親。義家の第二子。鳥羽天皇の天仁元年(一七六八年)誅せられた。

(三)後白河法皇。

御裳濯川の流

おほけなく

(四)二條天皇。

あやなき業

戰をなすこと數へ盡すべからず。それも皆一ふし二ふしのよせはありけん。若しはすぢ異なる大臣、さらでもおほやけともなるべききざみの少しのたがひめにむげの民と爭ひて君の滅び給へる例、この國にはいと數多も聞えざめり。されば承平の將門、天慶の純(一)友、康和の義(二)親、いづれも皆猛かりけれど、宣旨には勝たざりき。保元に崇德院の世を亂り給ひしだに、(三)故院の御位にてうち勝ち給ひしかば、「天照大御神も御裳濯川の同じ流と申しながら、なほ時の御門を守り給はすることは強きなめり。」とぞ、古き人々も聞えし。また信賴の衛門督おほけなく(四)二條院を脅し奉りしも、遂に空しき屍をぞ道の邊に棄てられける。かゝれば舊りにしことを思ふにも、なほさりともいかでか三皇、今上數多在します王城の徒に亡ぶるやうやはあらんと、たのもしくこそ覺えしに、かくいとあやなき業の出できぬる

(一)後鳥羽院。

(二)「津の國のこやとも人をいふべきに、隙こそなけれ。葦の八重ぶき」(後拾遺集、和泉式部)

霞の洞

は、この世一つのことにもあらざらめども、迷の愚かなるまへには、なほいと怪しかりし。

六(一)つにて位に即かせ給ひて、十三年おはしましき。おり給ひて後も、土佐院十二年、佐渡院十一年、なほ天の下には同じことなりしかば、すべて三十六年がほど、この國のあるじとして、萬機の政を御心一つにをさめ、百の官を從へ給へりしそのほど、吹く風の草木を靡かすよりもまされる御有樣にて、遠きを憐み近きを撫で給ふ御惠、雨の脚よりも繁ければ、津(二)の國のこやのひまなき政を聞し召すにも、難波の葦の亂れざらんことを思しき。藐姑射の山の峰の松もやうやう枝を連ねて、千代に八千代を重ね、霞の洞の御すまひ幾春を經ても、空行く月日の限り知らず、のどけくおはしましぬべかりける世を、ありありてよしなき一ふしに、今はかく花の都をさへ立別れ、己がちりぢりにさすらへ、磯のとま屋に軒を並べて、自ちこと問

けしきばかり事そぎたり柴の庵のしばし

(一)「いづくにもすまれずばただすまずあらん、柴の庵のしばしなる世に。」（新古今集、西行法師）

故づく

(二)後鳥羽院の造られた殿。攝津國三島郡島本村。

(三)和漢朗詠集白樂天の詩句、「三五夜中新月色、二千里外故人心」

ふものとては、浦に釣するあま小舟、鹽やく煙の靡く方をも、わが故郷のしるべかとばかり詠め過させ給ふ御すまひどもは、それまでと月日を限りたらんだに、あす知らぬ世のうしろめたさに、いと心細かるべし。まいていつをはてとか廻りあふべき限りだになく、雲の浪、煙の浪の幾重とも知らぬ境に世をつくし給ふべき御さまども、口惜しといふもおろかなり。

このおはします所は、人離れ里遠き島の中なり。海面よりは少し引入りて、山蔭に片そへて、大きやかなる巖のそばだてるをたよりにて、松の柱に葦ふける廊など、けしきばかり事そぎたり。誠に柴(一)の庵のたゞしばしと、かりそめに見えたる御宿りなれど、さる方になまめかしく故づきてしなさせ給へり。水無瀬殿(二)思し出づるも夢のやうになん。遥々と見やらるゝ海の眺望、二千里(三)の外も殘りなき心ちする、今更めきたり。汐風のいとこちたく吹きくるを聞し召して、

われこそは新島守よおきの海のあらき波かぜこゝろして吹け

おなじ世にまたすみの江の月や見んけふこそよそに沖のしまもり

——増鏡——

一六　生命の直感

相馬御風

見るかげもない一本の樹でも、天候の具合により、季節の相違により、時刻の推移により、その他種々な外界の變化によつて、實に複雜極る風姿の變化を呈する。私は先頃十日あまり病臥してゐる間に、貧弱な自分の家の庭を毎日眺め暮して、しみじみとその事實を味はふことができた。

この樹木の複雜極りない風姿の變化を毎日眺め暮してゐる中に、いつとはなしに、私は植物にも一種の表情のあることを思はな

いてはゐられないやうになつた。美しく晴れわたつた大空の下に、飽くことを知らず輝かしい太陽の光を浴びてゐる時の樹木の表情、重苦しいやうな雨に打たれてゐる時の樹木の表情、嵐に揉まれて身悶えしてゐる時の樹木の表情、夕暮の闇に包まれようとしてゐる時の樹木の表情、朝の光を受けてゐる時の樹木の表情、いづれもその時時の特色のある氣分が、一片の葉、一本の枝の上にも鮮かに表現されるのである。そして、その樹木の複雜な表情の變化は、それを眺めてゐる私に向かつて、沈默の中に無限な意味を語るやうに思はれる。

嵐（山口華揚筆）

渾融

(一)Rhythm.

私はその複雜多趣な樹木の表情の變化に隨つて、或時は高く、或時は低く、或時は輕く、或時は重く、私の情緒のリズム(一)のさまざまな變化を經驗することができた。そして、その複雜な情緒變化の節調をたどり行く中に、私の心全體が、或一つの大きな力に吸收されて行くのを意識したのである。それは自分ながら驚かれるばかり嚴肅な力強い意識であつた。それは日常の生活に於て殆ど經驗することのできなかつたほどの奇異な大意識であつた。

私は始めて生命そのものを感得することができたやうな氣がした。複雜多趣な變化そのものの力を一貫した或一種の靈妙な力の意識、漠然としてとらへ所はないが、しかも何者の力を以てしても冒し難い、嚴肅な力の意識がそれであつた。そのなんとも知れない嚴肅な意識に於て、私はまた「我」といふ一個の存在と、樹木といふ一個の存在とが、或説明し難い作用によつて、全然渾融し盡したこ

とを語ることができる。即ちその場合に於ける樹木の表情は、同時に私そのものの表情であり、私そのものの表情は、やがて樹木そのものの表情であつた。私は樹木と共に表情し、樹木は私と共に呼吸したのである。そして、最後に躍動し來つた、なんとも知れない嚴肅な生命の意識に至つて、私の眼中には、もはや樹木と私との別がなく、全然或一つの偉大な力に吸收され盡したことを記憶する。

その刹那、寢てゐた私は我知らず起上つて、端然と靜坐したことも、今に於てはなほ憚らず語り得る。それはほんの一瞬間のできごとに過ぎなかつた。しかし、私に取つては、實に實に得難い嚴肅な經驗であつた。私はその時くらゐ鮮かに生命そのものの力を感じたことは曾てなく、その時くらゐ鮮かに全意識の踊躍を感じたことは曾てなかつた。病氣に苦しんでゐる「我」の奥に、何者によつても冒されることのない强大な生命の活躍がある。その時くらゐ强烈に

それを感じたことは曾てなかつた。

歡、悲み、苦みと、わが生活の風姿は、その時々にさまざまな變化を經つゝあるが、その複雜多趣な風姿を一貫して、默々として流れる生命の流がある。日に照らされゝば歡の姿を現し、雨に打たれゝば悲みの思を表し、風に揉まれゝば苦悶の風姿を示す樹木の千姿萬態、しかもその複雜多趣な生活の風姿を一貫して、儼然たる統一を現すものはなんであるか。いはく、たゞ生き得る限り生きようとする力、伸び得る限り伸びようとする力それである。日に照らされてゐる時、雨に打たれてゐる時、はたまた暴風に揉まれてゐる時、彼等樹木の表に現す姿はさまざまに變つてゐるが、そのさまざまに變る風姿を通じて、常にあの生き得る限り生きようとする發展がある。伸び得る限り伸びようとする力がある。闇深く、雨烈しく、風凄じい夜に、今にも滅びようとするやうな傷ましい呻聲を立てて揉ま

れ苦しむ森の響、その慘澹たる響に怖れわなゝきながらも、我々はなほかつその中に多くの樹木の生きようとする命、伸びようとする力の肅然たる活動を直感することができる。あらゆる刹那、あらゆる境遇を通じて生きようとし、生きてゐるものの中心には、默々として流れて止まない生命の力がある。病苦はいかに重く我を壓してくるとも、運命はいかに意地惡く我に迫つてくるとも、いや、更に更にあの永劫の闇なる死が、よしいかに我に近く攻寄せてくる瞬間でも、我には我の生命力がある。何者の威嚇にも屈しない生命の力がある。死の闇を眼前に凝視しながらも、なほかつ我々は飽くまでも主張すべき生の光明がある。

私は、貧しいわが庭に伸びつゝある二三本の樹木の生命と、私自らの生命との不可思議な渾融を直感し得た私は、突如として全體意識の上に一種の嚴肅な衝動を感じたのである。なんともいひ難い生命觀に打たれたのである。そして、病苦にさいなまれつゝある「我」の奥に、何者の力を以てしても動かすことのできない權威のある生命の活躍を直感し得たのである。私が突如として起上つて、床の上に靜坐したその刹那の嚴肅な歡喜の感は、實に私の未だ曾て經驗しなかつたところのものであつた。

賢明な世間の識者たちは、或は私のこの告白を聞いて、その幼稚を笑ふかも知れない。しかし、私は未だ曾て得なかつたこの經驗を、なんとしても告白せずにはゐられないのである。なんとなれば、私のこの感激の印象が私の心の中から消えない限り、私、少くとも私一個は、決して再び「生命とはなんぞ。」といふ愚問を繰返さないであらうから。

「生命とはなんぞ。」今にして思へば、これくらゐ愚かな疑問がまたとあらうか。生命はたゞ生命である。生命はたゞ直感によつてだけ

根本動力

把握することのできる神秘沈默な力である。生命の力に對する疑くらゐ生命のない疑はない。直感と信仰。生命力を把握することのできる途は、この二つより外にはない。

生命力の直感と信仰。私はそこから私の生活の根本動力を得て來ようと思ふ。私の求めるところの宗教は、實にこの生命そのものの直感を措いて外にはない。私はこの生命そのものの直感によつて、できる限り生命そのものを讃美し、信仰し、高調して生きたいと思ふ。そして、その讃美と信仰と隨喜とによつて、あらゆる自我の營に不壞の權威と絕對の莊嚴とを加へながら生きていかうと思ふ。

あゝ、生命の力の直感。どす黑い病苦の裡に突如として私の全意識を躍動させたその刹那の感激は、今や何者の權威を以てしても、私の心からこれを奪ひ去ることはできない。私は永久にこの感激をして、私のあらゆる營の力の源たらせたいと思ふ。

正子
餘喘
のしかゝる

一七　眞夜中から黎明まで

豐島與志雄

時の區劃からいへば、正子は一日と次の日との境界であるけれども、徹夜するものに取つては、この境界は全く感じられない。自分に取つては、午前二時頃までは前夜の連續である。遠い汽笛の音、空氣の亂、何かしら動いてゐるもののどよめき、一日の生活の餘喘、それ等のものが大氣中に漂つてゐる。試みに戶外へ出て見よ。星の光はまだ人に親みの色を帶びて居り、街路の空氣には人の息が交つてゐて、歸り後れて飄々乎たる人影が、犬と共に散在してゐる。

そして、午前二時頃から、深い沈默と睡眠とが萬象の上に重くのしかゝつてくる。すべて夜を徹する人々が――遊戲に心奪はれてゐるものや、仕事に縛られてゐるものなどを除いて――なんとなく起きてゐるのを堪難く感じだすのは、この時である。四五の友人

鳴りを潜む
息を凝らす
對稱

相集つて談笑してゐるうちにも、ふと言葉がとぎれ、心が沈んで、薄暗い影に鎖されるのはこの時である。地上のあらゆるものが、鳴りを潜め息を凝らして、石のやうに冷たく固く沈默してしまひ、空氣が重々しく淀んで來、星の光が空の奥深く潜んで行く。そして、この死のやうな靜寂のうちに、天と地とに跨がる大きな影が垂れこめて、月のある夜は月の光を、月のない夜は夜の闇を、嵐の夜はその雨風を、超自然的な帷のうちに抱きすくめる。その帷のひだや裾の奥から、無數の神秘な眼がじつとのぞき出す。すべてもの陰に潜んでゐるもの、人の眼につかないもの、形も色も音もない幽鬼の氣、この世のものでないものが、空に地に浮動し彷徨する。しかもそれはただ魂に感ぜられるだけで、そこからくる魂のおびえも手傳つて、官能の對稱たる沈默と靜寂とは、層々と積重つた深みを倍加する。地上の生あるものの皆は、人も、獸も、草も、木も、さういふ深みの底に沈み

蠱惑的
逢魔の時
丑時參
擾音

溺れて、蠱惑的な窒息に眠り入る。それはまさしく寂滅の時、逢魔の時、呪咀の時、丑時參(うしのときまゐり)の時刻である。露や霜もおりるを止める。時間も歩みを止める。死と神秘との時間である。たゞ時計の針の止らないのが不思議である。

そして、冬ならば四時頃、夏ならば三時頃、突然或物音が響く。身ぶるひに似た木の葉の戰ぎ、ぼうと尻きれの汽笛の音、無意識的な犬の遠吠、または何物とも知れぬ擾音、それ等の一つが不意にどこからともなく起つてくる。それが相圖である。沈默と魔睡との底に凝りかたまつてゐた萬象が、一齊にぞつと寒氣立つてくる。星の光がきらきらとした凄みを帶びる。月の面がまざまざと磨澄まされる。或は濃く淀んだ闇がむくむくと動き出す。空氣が恐しい勢で徐々に流れ出す。或は風の方向が一息に變る。そして、地上のあらゆるもののが、震へながら肩を聳かす。無生のものが生の息吹(いぶき)に觸れて恐れ

戰くに似てゐる。かく天地萬象が寒氣立つと共に、蠱惑的な鬼氣はものの深みに姿を潜めてしまふ。それはたゞもの凄い時刻、まだ形を具へない恐怖と歡喜との渾沌たる時刻である。復活の戰きの時である。

その戰慄が暫く續くうちに、ふつと全く何故ともなく、すべてが消え去る空虚の時がくる。眼覺めながら息を潜めた時刻である。萬象がむくむくと起上りかけて、またとろりとやる時刻である。最早そこには生も死も何ものもない。月や星の光もぼやけ、闇の黒さも艶を失ひ、大地の上を押渡る微風も息をつき、あらゆるもの音が消失せる。萬象の律動がぴたり合つたその隙間である、徹夜のものが最もひどい打擊を感ずるのは、この時刻に於てである。もはや口を利くことも、仕事を續けることも、起きてゐることまでが、堪難い努力となる。天地がほつと眼覺の息を吐盡して、何故ともないためらひの中に、再び息を吸ひこみかねてゐる、全く空虚なあひまである。

そして俄に、輝かしい、しかもまだほのかな交響樂が、何所ともなく起つてくる。空には星のさゝやき、地上には遠く應へ合ふ反響、そして、一際高く鷄の聲、車の響、汽笛の音、それ等の底に籠つてゐる人聲。一時のとろりとした假睡から、はつと眼覺めて起上る萬象の寢間着の衣ずれの音である。ほの暗い夢と輝かしい幻とが入代る氣配である。新たに立上つてくるその幻は、ものの隅々まで訪れて、すべての閉ぢてゐる眼を見開かせる。爽かな空氣が空に地に流れる。草木の葉末には露や霜が繁く結ばれる。夜を徹してゐるものは、じつと座について居られなくなつて、故もなく立上つて歩きだす。そして、試に窓を開けば、東の空にはうつすらと紫の色が流れてゐて、それが見る見る中に紅色を帶びてくると共に、遠く聞えてゐたほのかな擾音が、いつしか騷然たる反響に高まつて來て、人の足音、小

鳥の歌、星の最後のひらめき、そして、地上の萬物がほの白い明るみの中に形を浮出して、その上を、觸れなばさらさらと音を立てさうな爽かな空氣が、夜の闇と夢とを運んで流れて行く。立並んだ人家はまだ默々と眠つてゐるけれど、その中に在るものは、最早夜の夢ではなくて、新たな一日の幻影である。空には清い日の光が放射し、地上には輝かしい生活が始められてゐる。

一八　臺所の經濟說

婦人は消費者であつて生産者でない、家庭は消費の場所であつて生産の場所でないと、一般に考へて居るものが少くない。しかし、それは大なる誤解であると思ふ。そして、この間違つた說が正されるまでは、日本の婦人問題、ひいて國民生活問題の解決を十分に見ることができないと思ふ。

資本主義

私は婦人は男子と同様に立派な生産者であり、家庭は消費の場所であると同時に、婦人が生産の場所であつて、臺所は一種の生産工場であると信ずる。それのみならず、わが國には今日七十餘萬の工業婦人勞動者が、純然たる生産事業に從事して居るが上に、近頃では各種の職業婦人が、盛に活動して居る。それに加へて、家庭に於てさへ、婦人は嚴密な意義で富の生産者であることを、學理上認めざるを得ないのであるから、いかに生産萬能の經濟であつても、婦人が消費者であるとして輕視されるのは、何等の理由もないのである。然るに今までのわが國の事實が、婦人が經濟界に處して殆ど無能者であつたといふのは、抑、何が故であらうか。

資本主義が盛で、富國强兵が經濟の最高理想であつた時代に於ては、大仕掛の機械生産にたづさはることのできない婦人、また先天的に强兵たり得ない女性が社會から輕視されて、男子より一段

劣等なものとして取りあつかはれたのは、止むを得ないことである。けれども、今は世界平和の曙光が輝き始めた新時代であつて、新しい經濟學説に於ては、婦人の家庭勞動にすら、一種の重要な生産である意味が認められてゐるのであるから、自然婦人の地位が大いに高まるべき時期が到來したのである。

元來生産とは、無から有を創造することではない。それは經濟學の原則の示す通り、人力には不可能な業である。經濟學でいふ生産とは、單に物の效力、即ち人の慾望を滿足させる物の力を造り出すことをいふのである。料理屋で價格一圓の食物を家庭で六十錢でできるとすれば、差引四十錢は家庭で生産された效力の價値である。そして、臺所はこれ等の生産が行はれてゐる重要な生産工場であることは勿論である。

然るに同じ生産であつても、家庭の生産工場を社會の産業工場に比すると、莫大な相違が存在してゐる。後者は秩序整然として、精巧を極めた大規模な機械的生産であるのに、前者は不秩序極つた雜然とした手工生産に過ぎない。專門學者に倣つて世界の進歩を四階段にすると、第一期は、自然食料を生産資料として居る野蠻時代、第二期は、手工生産を主として生活してゐる半開時代、第三期は、機械生産を主として居る文明時代、第四期は、人格尊重主義の上に成立つて居る文化時代である。そして、今日は最高な文化時代までに社會は進歩してゐるはずであるのに、その文化人の臺所は、いまだに前々期の半開時代、即ち手工時代に屬する狀態にあるといふことは、著しい時代錯誤である。

前時代に屬する文明時代に於ては、個人生活の充實の如きは問題にならず、家庭生活の實質よりも外見を重んじ、たゞ門構や玄關、客室等を立派にすればよいと考へ、家族生活に最も大切な臺所の

如きは、これを顧る必要を認めなかつた。それで外部の經濟界は急速な進歩を來したが、內部の臺所即ち家庭生產工場は、二三百年前の手工時代そのまゝのものとなつて、取殘されたものであらう。故にそこで働く生產者即ち婦人は、勞多くして効果の少い生產よりできない。彼等は長時間、無趣味な雜務に從事しなければならぬから、自己向上の時間の餘裕もなければ、その精神もなく、保守生活に一生を送るのである。

婦人解放運動は精神的方面の活動と共に、卑近な臺所の改造から始らねばならぬ。臺所勞動も重要な生產的勞動であることが認められる今日である以上は、婦人勞動も經濟學の原理に基づき、最小犧牲に依つて最大効果を收めようとする經濟主義に依つて、活動を盛にしなければならぬことはいふまでもない。さうして、それが爲には、すべて苦痛が多くして不愉快な仕事は成るべく機械に

なさしめ、いかにしても人力でなければならぬ勞動は、これを遊戲化するといふ新しい方針を嚴守しなければならない。

要するに、婦人が生產者として、男子同樣な經濟的地位を占めようとするには、根本的にその生產を現代化しなければならぬ。臺所の改造が行はれて、始めて家庭內外の生產の業の調和が行はれ、新しい眞の文化時代的生活を男女共に樂しむことができると同時に、社會生活が一層意味深いものになり得るのである。

若しそれ婦人の努力と男子の同情とに依つて、一たび臺所が現代的の生產工場に改造され、そこに新知識が盛に適用されて生產が行はれる場合には、家庭生產の勞動も大部分機械化され、勞力と時間とに於て著しい節約を見ることができるであらう。その結果として、女子の能力が十分に發揮されるやうになり、從來のやうに男子ばかりの文化であつた文明時代より進んで、男女同等の力で

活動する男女協力の文化時代の幸福な生活を營むことができるであらう。故に臺所に關する正當な經濟說を十分に理解することは、單に婦人ばかりでなく、男子の爲にも大なる利益を持來すものであるから、この方面にも文化運動を起すことが、社會改造の爲必要であると信ずる。

——森本厚吉の文による——

自修文

一九　上古の人の飲んだ酒と氷と牛乳

木宮泰彥

上古といへばいかにも無智蒙昧で、食物とか飲物とかいふものも、極めてお粗末な無味なものばかりであらうと想像されるけれども、あながちそんなものでもない。古事記や日本書紀を繙いて見ると、種々な果物を釀して造つた芳しい酒や、幾たびか釀しては絞り絞つては釀した甘い酒のことなどが、所々に散見してゐる。また冬の間に氷を窟に圍つて置いて、盛夏になつてから酒や水にまぜて飲料としたこともあるし、牛乳すら愛用したハイカラな時代もあつた。

上古酒のことを「くし」ともいひ、また「き」ともいつた。「き」は「くし」のつまつたもので、現今では神に奉る酒を神酒といふのは、この例である。これを「さけ」といふやうになつたのは、酒を飲めばおのづと陽氣になつて心が榮えるからで、その「榮え」がつまつて「さけ」となつたのであるといはれてゐる。

素戔嗚尊が出雲の簸の川上で、(一)脚摩乳、手摩乳の爲にやしほをりの酒を八個の槽に入れて、八岐の大蛇を醉はしめて退治されたことは、有名な話である。これによつて見れば、わが國には神代からすでに酒のあつたことがわかる。

上古酒を造るに米からするものと、またいろいろな果物からするものとあつた。米からするものは、まづ焚いて飯となし、これ

(一)素戔嗚尊の妃櫛名田比賣の両親。
やしほをり　たびたびかもすこと、即ち精製すること。

(一)第十五代。今から千六百數十年前。
大御酒　酒をたつとんでいふ稱。
口皷をうつ　舌うちをする。また口拍子をとることをもいふ。
(二)第十六代。應神天皇の御子。
(三)古い地名。今は奈良縣山邊郡に屬する地。
稻置　もと稻穀や收税などを掌つた職。

を漬して臼に入れ、つきたゞらして釀したものである。(一)應神天皇の御代に國栖といつて、吉野川の上流の奥深い谷間に居住し、常に果物を取つて食ひ、蝦蟆を煮て上味とした民があつた。かゝる粗野な民であるけれども、酒を釀すことを知つてゐたと見えて、天皇が吉野宮に行幸あらせられた時、大御酒を奉り、口皷をうつて歌をうたひながら、臼で飯をつきたゞらす時の仕業をしつゝ舞うたことが、歴史に見えてゐる。また酒を果物から釀したことも、神代の歴史に見えて居る。

次に氷のことについては、日本書紀(二)仁德天皇の條に見えて居る。天皇の御代に、額田大中彦皇子が、大和國の(三)闘鷄といふ所へ御遊獵にお出ましになり、山の上から野の中を見そなはすと、廬の如きものがあるので、御不審に思し召され、闘鷄の稻置大山主といふものをお呼出しになつて、一體あれは何かとお尋ねになると、あれは氷室と申して、土を掘ること丈餘、草を以てその上を覆

(一)第三十六代。今から約千三百年前。
(二)當時支那にあつた國の名。支那の東南部に當る。

ひ、厚く茅や荻を敷いて、氷をその上に置き、夏になつてこれを取出して、水や酒に漬して用ひるのでありますと答へたので、皇子は珍しく思し召され、その氷をお持歸りになつて、天皇に獻ぜられた。これから毎年冬氷を貯へて、春の始から朝廷に奉ることとなつたといふことである。

平安時代になると、朝廷に於ては勿論、貴族社會に於ても盛に氷を用ひたもので、夏の夕べの會合などには、必ず氷を割つて客に饗應した。また氷を扇形に作り、或は氷の上に歌などを書き、いろいろな趣向をこらして、贈物ともしたものである。當時はまだ砂糖といふものがない時代であるから、甘味として、甘茶から製した「あまづら」といふものを用ひたといふことである。

牛乳を飲料として用ひるやうになつたのは、大化以後のことではあるが、(一)孝德天皇の御代に、(二)呉の國から歸化した善那といふものが、牛乳を朝廷に奉つた。天皇いたく歡ばせられ、善那に和藥

(一)Condensed milk.
(二)Cream.
蘇と醍醐とは恐らくはバタとチーズのことであらう。
六合

使主といふ氏姓を賜ひ、その子孫は代々牛乳を奉ることを命ぜられた。その後牛乳ばかりでなく、蘇と稱して、一斗の牛乳を一升に煮詰め、今日のコンデンスミルク(一)に似たものを造つて、これを壺に入れ朝廷に奉らしめたことがある。またこれを更に精製した醍醐といふものすらあつた。醍醐は今日のクリーム(二)に類するものである。

——おもしろい日本歴史の話——

二〇　天は輝き地は悦ぶ

中村孝也

年ここにまた新たにして光明四海にみち、
希望と幸福との交響樂、洋々として六合に漲る。
天は輝き、地は悦び、人は舊き衣を脱いで、
身にまとふ新装の花やかさ。

山巓に身を起して下界を遠く眺むれば、
眼もはるかなる廣野のあなた、
煙波夢に似てなほ淡きところ、
一抹の紫雲たゞようて動かす。
忽ち見る、雲は黄金のへりを彩られて、
醒めたるものの如くそゞろに搖曳するを。
瞬一瞬、靜かなりし姿はやうやく動き、
動ける姿は脉々たる靈氣を帶びて輝き來る。
見よ、日は昇る。
金光燦として大天大地に遍滿するところ
大海原の浪は燃え、野も、山も、森も、林も

美なるかな赫焉として照映す。
あゝ、偉いなるかな宇宙の帝王。生命の權化。
爾の君臨するところ疲れたるものは起ち、
悲しめるものは悦び、惱めるもの、衰へたるもの、
萬象悉くきらびやかなる光耀の裡に蘇る。

歴史は遠し、俯仰す悠々五千年、
知識の高峰に身を起して古今を大觀すれば、
權勢、財利、名譽、我慾の暗雲深くたちこめて、
興亡起伏の跡、なんぞ偏に擾々たる。
しかしながら時として見る、燦たる大光明の

三界

雲表にかゝぐ

無明の闇黑をてらしてかゞやき來ることあるを。
しばらく西天にきらめく宵の明星か、あらず。
忽然として徂徠する彗星か、否、決して然らず。

それは實に東海の浪を蹴つて昇る大日輪なりき。
そは一切の差別を超越して、
人天三界に遍滿する共存共榮の平等愛を、
あらゆる人類の胸に涌きたゝしむる大光明なりき。

囚れたる思想の鎖はかくして放たれたりき。
時と所とを絶する久遠の生命は、かくして流れそめたりき。
人類最後の大理想は、かくして高く雲表にかゝげられ

(一)Sinai. アラビヤの西北端にある。ユダヤの昔イスラエルの豫言者モーゼが神から十誡を受けた所。

(二)Jordan. アラビヤの北西を流れる。ここでキリストが洗禮を受けた。

(三)印度とチベットとの境。釋迦の苦行した所。

(四)印度にある河。今パルグ河といひ、恒河の一支流。佛教徒の神聖視する河で釋迦はこの河で沐浴した。

光華明彩

たりき。

自由と平和と幸福とは、かくして永へに人の心を支配す。

(一)シナイの峰にかゝれる雲は今もなほ輝き、
(二)ヨルダンの岸打つ浪は讃美の聲を絶たず、
(三)雪山の曙ほがらかにてりはえて、
(四)尼連禪河のほとり大聖の面影の若々しさ。
逝くものはかくの如し、晝と夜とのをやみもなく、
時は流れ世はうつろへども、
千秋萬古かはらざるものは仁義の大教訓、
光華明彩、六合に照徹するを見ずや。

風塵に塗る

先聖の遺訓は光華六合に照徹すといへども、
末法の亞流枝葉に屑々(せつせつ)として、
金襴の法衣夙に風塵に塗れ、
愛と人道との教、心、詞に及ばず。

孔孟の郷國干戈しきりに動き、
東海君子の國もまた浪おだやかならず。
思想の流は亂され、信仰は侮られつ、
人は薄明の裡に喘ぎ悶えて、天の一角を望めり。

あゝ、天界の夜は明けたり。さらばなんの執着ぞ。
起つて千仭の岡にわが衣を振はんか。

かの旭日の爽かに天半に冲するが如く、
冀はくは新たなる生命を以て、わが世を豊かならしめん。

年は改りぬ。光明は四海に滿ちわたれり。
天は輝き地は悦び、人もまた一振し來る。
新たなる時代の展開は刻々息む時なし。
あゝ、その來らんとするものに無限の榮光あれ。

二一　春は曙

清少納言

四季

春は曙。やうやう白くなり行く山ぎは少しあかりて紫だちたる雲の細くたなびきたる。

夏は夜。月の頃はさらなり。闇もなほ螢とびちがひたる。雨などの

降るさへをかし。

秋は夕暮。夕日花やかにさして、山の端いと近くなりたるに、烏のねどころへ行くとて、三つ四つ二つなど飛行くさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆる、いとをかし。日入りはてて、風の音、蟲の音などいとあはれなり。

冬はつとめて。雪の降りたるはいふべきにもあらず。霜などのいと白く、またさらでもいと寒きに、火など急ぎおこして、炭もてわたるもいとつきづきし。晝になりてぬるくゆるびもて行けば、すびつ、火桶の火も、白き灰がちになりぬるはわろし。

ふるものは

雪。霰。みぞれはにくけれど、雪の眞白にてまじりたるをかし。雪は檜皮ぶきいとめでたし。少し消えがたになりたるほど、またいと多うは降らぬが、瓦の目毎に入りて、黒う、眞白に見えたる、いとをかし。

時雨、霰は板屋霜も板屋、庭。

雲は

白き。紫。黒き雲あはれなり。風吹くをりの雨雲。明けはなるゝほどの黒き雲の、やうやう白うなり行くもいとをかし。

月のいと明き面に、薄き雲いとあはれなり。

あてなるもの

水晶の珠數。藤の花。梅の花に雪のふりたる。いみじう美しき兒のいちごくひたる。

木の花は

梅は濃くも薄くも紅梅。櫻の花びら多きに、葉色濃きが、枝細くて咲きたる藤の花、しなひ長く色よく咲きたる、いとめでたし。卯の花は品劣りて何となけれど、咲く頃のをかしう、杜鵑の蔭に隠るらんと思ふにいとをかし。祭の歸さに紫野(一)のわたり近きあやしの家ど

(一)京都府愛宕郡大德寺邊の舊名。

も、おどろなる垣根などに、いと白う咲きたるこそをかしけれ。青色の衣の上に白き單がさねかづきたるやうにて、いとをかし。

梨の花（木村響泉筆）

四月の晦、五月の朔などの頃ほひ橘の葉のいと濃く青きに、花のいと白く咲きたるに、雨の降りたるつとめてなどは世になく心あるさまにをかし。花の中より實の黄金の玉と見えて、いみじくきはやかに見えたるなど、朝露にぬれたる櫻にも劣らず杜鵑のよすがとさへ思へばにや、なほ更にいふべきにもあらず。

梨の花世にすさまじくあやしきものにして、目に近くはかなき文つけなどだにせず。愛敬おくれたる人の顔など見ては、たとひに

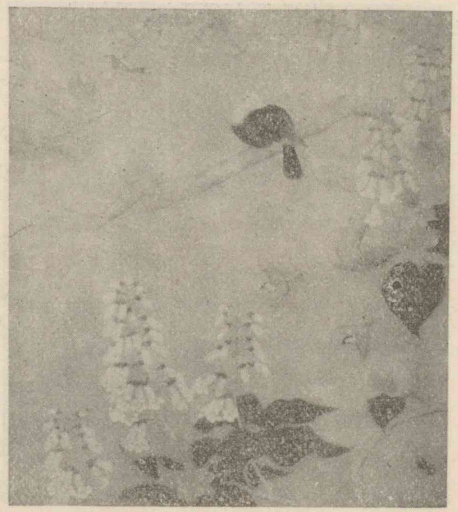
よすが

さりともあるやうあらん

ことごとし

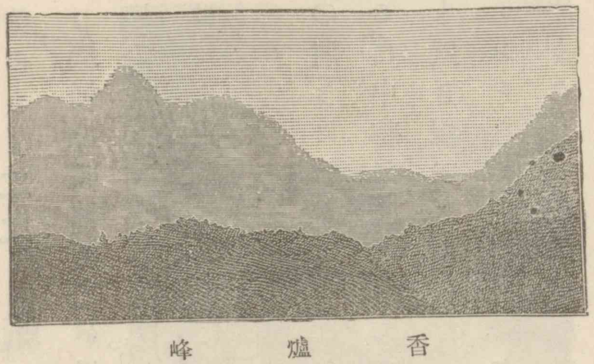
いふも、げにその色よりして愛なく見ゆるを、もろこしに限りなきものにて文にも作るなるを、さりともあるやうあらんとて、せめて見れば、花びらのはしに、をかしき匂こそ心もとなくつきためれ。さてはなほいみじうめでたきことは類あらじと覺えたり。

桐の花、紫に咲きたるはなほをかしきを、葉のひろごり、さまうたてあれど、また他木どもとひとしういふべきにあらず。もろこしにことごとしき名つきたる鳥の、これにしも住むらん、心ことなり。まして琴に作りてさまざまなる音の出でくるなどをかしとは世の常にいふべくやはある。いみじうこそはめでたけれ。


桐の花（木村響泉筆）

（釋）
(一)支那の江西省九江縣の西南。
(二)一條天皇の皇后定子。
(三)白居易の詩、「香爐峯雪撥簾看。」

木のさまぞにくげなれど、あふちの花いとをかし。枯ればなにさまことに咲きて、必ず五月五日に逢ふもをかし。


香爐峰

香爐峰

雪いと高く降りたるを、例ならず御格子まゐらせて、すびつに火おこして、物語などして集りさむらふに、「少納言よ、香爐峰(一)の雪はいかならん。」と(二)仰せられければ、御格子あげさせて、御簾高く卷上げたれば、笑はせ給ふ。人々も皆さることは知り(三)、歌などにさへうたへど、思ひこそ寄らざりつれ。なほこの宮の人には、さるべかんめり。」といふ。

——枕ノ草子——

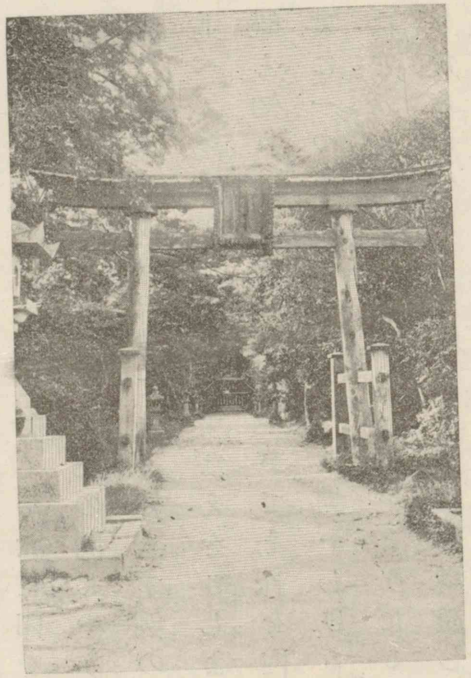
（一）大阪府泉南郡長瀧村。

二三　蟻通の明神

清少納言

蟻(一)通の明神、貫之が馬のわづらひけるに、この明神のやませ給ふとて、歌詠みて奉りけんに、やめ給ひけん、いとをかし。この蟻通とつけたる意は、まことにやあらん、昔おはしましける帝の、たゞ若き人をのみ思し召して、四十になりぬるをば失はせ給ひければ、他の國の遠きに行きかくれなどして、更に都のうちにさるもののなかりけるに、中將なりける人の、世の覺めでたく、心なども賢かりけるが、七十近き親二人をもたりけるが、かう四十をだに制あるに、ましていとおそろしとおぢ騷ぐを、いみじう孝ある人にて、遠き所には更に住ませじ、一日に一たび見ではえあるまじとて、密に夜々家の內の土を掘りて、その內に屋を建てて、それに籠めすゑて、行きつゝ見る。おほやけにも人にも、うせ隱れたる由を知らせてあり。世に立ちま

じらはんをこそ嫌ひ給はめ、家に入りゐたらん人をば、知らでもおはせかし、うたてありける世にこそ。親は上達部などにやありけん、いと心賢く、萬づのこと知りたりければ、この中將若けれど才あり、いたり賢くして、めでたしと思すなりけり。唐土の帝、この國の帝をいかで謀りて、この國うち取らんとて、常に試み、爭事をして送り給ひけるに、つやつやとまろに美しげに削りたる木の二尺許あるを「これが本末いづかたぞ。」と問ひ奉りたるに、すべて知るべきやうなければ、帝思し召し煩ひたるに、いとほしくて、親の許に行



蟻通神社

すはえ

きて、かうかうのことなんあるといへば「たゞはやからん川に、立ちながら横ざまに投入れ見んに、かへりて流れん方を、末と記して遣せ。」と教ふ。參りて我しり顏にして「試みはべらん。」とて、人々具して投入れたるに、さきにして行くかたに印をつけて遣したれば、實にさなりけり。また二尺許なる蛇の同じやうなるを「これはいづれか雄雌。」とて奉れり。また更に人え知らず。例の中將行きて問へば「二つを並べて、尾のかたに細きすはえをさしよせんに、尾はたらかさんを雌と知れ。」といひければ、やがてそれを内裏のうちにてさしければ、實に一つは動かさず、一つは動かしけるに、また印つけて遣しけり。ほど久しうして、七曲（わた）にわだかまりたる玉の中通りて、左右に口あきたるが小さきを奉りて「これに緒通して賜はらん、この國に皆しはべることなり。」とて奉りたるに、いみじきものの上手もえしはべらず。そこらの上達部よりはじめて、ありとある人知らずといふに、

また行きて、かくなんといへば「大きなる蟻を二つ捕へて、腰に細き絲をつけ、またそれに今少し太きをつけて、あなたの口に蜜を塗りて見よ。」といひければ、さ申して蟻を入れたりけるに、蜜の香を嗅ぎて、實にいと疾う穴のあなた口に出でにけり。さてその絲の貫かれたるを遣したりける後になん、なほ日本は賢かりけりとて、後々はさることもせざりけり。この中將をいみじき人に思し召して「何事をし、いかなる位をか賜はるべき。」と仰せられければ「更に官（つかさ）位をも賜はらじ。たゞ老いたる父母の隱れ失せてはべるを尋ねて、都にすまする事を許させ給へ。」と申しければ「いみじう易きこと。」とて許されにければ、萬づの人の親これを聞きて、喜ぶこといみじかりけり。中將は大臣までになさせ給ひてなん、ありける。さてその人の神になりたるにやあらん、この明神の許へ詣でたりける人に、夜現れて宣ひける、

清少納言　小堀鞆音筆

七わだにまがれる玉の緒をぬきて
ありどほしとも知らずやあるらん
—枕ノ草子—

と宣ひけると、人の語りし。

二三　清少納言の意氣　萩野由之

清少納言は女中の文豪なり。その著したる枕ノ草子よ。その氣象の高さ、文章の美しさ、才藝の敏さ、讀むに隨ひて現れ來るところ、いかにも勝れたる女なりけり。かの書はもと隨筆の文なれば、教誡にはなし難きところなどもをりをりは交りたれども、それはそれとして、女子の心得となるべきことども多かり。今その數個條を拾ひて、今の女もかくあれかしといはんとす。

「すべて人には、一に思はれずばさらに何にかせん。たゞいみじう憎まれ、惡しうせられてあらん。二三にては死ぬともあらじ。一にて

をあらん。」これは彼が最もよく性格を發露したる詞なり。その意は、「人に第一等と思はるゝほどならばよし。然らずんば寧ろ憎まれてあらん。二等三等の人と思はるゝほどならば死ぬるに如かず。人は必ず第一等と思はれんこそ望ましけれ。」といへるなり。すべて人はこの氣象なかるべからず。

曾て人に歌を早く詠めと勸められたるに答へていはく「歌詠むといはれはべりし末々は、少し人に勝りて、そのをりの歌はこれこそありけれ、さはいへど、某が子なればなどいはれたらんこそかひある心地しはべらめ。つゆ取分きたる方もなくて、さすがに歌がましく我はと思へるさまに、最初に詠みいではべらんなん、亡き人の爲いとほしくはべる。」と。清少納言は清原深養父が曾孫にて、元輔が女なれば、祖父以來いづれも有名なる歌人なりき。その子孫ぞといはるゝものが、平凡なる歌詠みて、これこそわが歌にて候ふといは

(一)平生昌。
(二)和歌の名人。また三蹟といはれて書道の大家である。
(三)支那戰國時代の人。齊の相となり、三千人の食客を養つたといふ。

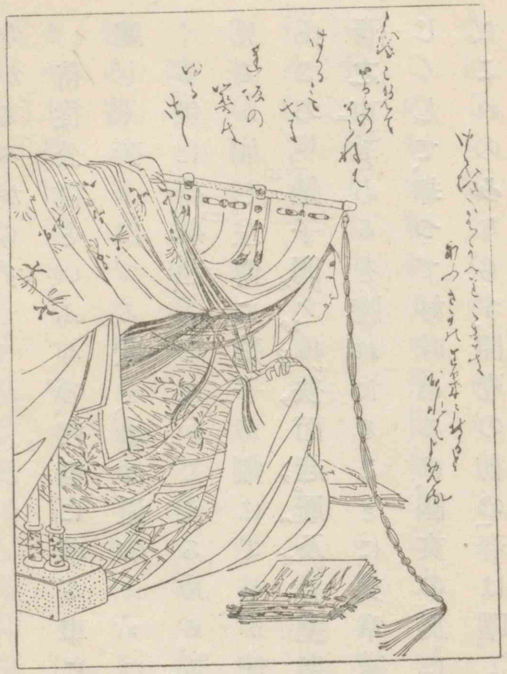
んは、父祖の名をも汚し、家の譽をも墜すものなれば、徒には詠まずといへるなり。さばかり上手の清少納言にてこの言あり。すべて人はこの精神なかるべからず。

中宮大進生昌(一)が「家の門の狹きは、家のほど、身のほどに合はせてはべるなり。」と答へしに、「されど門の限りを高く造りける人も聞ゆるは。」といひしは、前漢書なる于定國の故事を底に匂はせたるなり。

また藤原行成卿(二)が消息に「昨夜は夜を通して昔物語も聞えあかさんとせしを、鷄の聲に催されて。」とあるに答へて「いと夜深くはべりける鷄の聲は、孟嘗君(三)のにや。」といへるは、君の歸られしは、夜の未だ半ばならぬ時なり。それに鷄の鳴きしといはば、そは孟嘗君の鷄ならんと、史記の函谷關の故事を取れるなり。また皇后に答へ奉りて、「九品蓮臺の中には下品といふとも。」といひしは、觀無量壽經の詞を取りしなり。かく和漢梵の典故を縦横自在に應用して、さてそれを

(一)藤原齊信。爲光の子。

稜々しくも露さず、下に含めていへるなど、學問の博さ想ひやるべし。すべて人はこの學問なかるべからず。


清少納言

頭中將(一)といひし人、清少納言の才を試みんとて「蘭省の花時錦帳の下。」といへる白樂天の句を書きて、この下の句如何とありしに、下句は「廬山の雨夜草庵の中。」といふ句なれど、得意顏にありのまゝを書かんも見苦しと思ひて、「草の庵を誰か尋ねん。」と記して答へたる、また雪の日中宮の「少納言よ、香爐峰の雪はいかならん。」と仰せられければ、御簾高

(一)白氏長慶集ともいふ。白居易の詩文集。
庸人
(二)書名。春秋左子傳。
(三)宣公十四年のところに出てゐる。

く巻上げたりといへることの如き、いかに白氏文集を諳誦しゐたりとも庸人にはふと思ひつかぬところなり。すべて人はこの敏才なかるべからず。

侍從公信といふもの、內裡に參る車に追付かんと、急ぎ裝束して遽しく奔り出づる狀を「帶は道のまゝにゆひて、『しば、しば。』と追ひくる。供に侍、雜色、ものはかで走るめる。」と記したるは、急遽の狀今も見るが如し。左傳に、楚子が宋にてわが使者の殺されしを聞きたるところに、「楚子聞之投袂而起。履及於室皇。劍及於寢門之外。車及於蒲胥之市。」とあるを勝れたることに文章家はいへど、この文これに同じくして、却つて妙味あるは、國文の爲に氣を強くするに足れり。ただこれのみならず、開卷の初の「春は曙。」と書出したる四季の評の如きは、月雪花を品定する舊套を脫して、語々すべて人の意表に出でたるところ、古今に獨步して、文の妙を極めたり。兼好法師は一代の

陳腐

文人なり。その徒然草に四季を評せし一篇を收めたれども、これに比ぶる時は、陳腐にして味はひ少し。すべて文書かんと思ふほどの人は、この筆力なかるべからず。

この氣象、精神、この學問、敏才、筆力、いづれか一つを具へたらんだに、世に勝れたりと貴ばるゝものなるを、かく悉く具足したる、即ち清少納言が女中の文豪たる所以なり。世の文學に從事する女流は、今もなほかくあれかしと願ふなり。

然れども女の貴ぶところは貞淑の德なり。氣象餘りに高くして愼み蓄ふるところなくば、その弊は人を人ともせずして高慢に流るべし。學問博くして守るところなくば、その弊は大切なる婦德これに蔽はれぬべし。才思敏捷にして抑損するところなくば、浮薄に流れて却つて身を傷ふことあり。清少納言は和泉式部の如き操なき女にはあらざれども、さりとてまた紫式部の如き心操も聞えず、

かつそれ等のことについては、かの草子にも自家の心掛を記せしところを見ざれば、取出して擧ぐべきやうなし。されば清少納言の文豪は企て及ばんことを望むと共に、その摸倣の弊の生ぜんところをも知りて、豫め警め愼むべきものならん。

――史話と文話――

二四　春秋の爭

津田左右吉

自然界は、平安時代の人に取つては、人世の歡樂を助けるものとしてのみ價値があつたのである。換言すれば、彼等は自然界を以て人の翫弄すべきものと考へてゐた。奈良時代の人は、單純な小兒らしい態度で自然の美しい色と聲とを愛し、或は自然をわが氣分に融合させたのであつた。然るに平安時代の貴族に取つては、花も鳥も彼等に翫弄される爲に、咲きもし鳴きもしなければならぬのであつた。だから花も月も人の見る爲のものときめて置いて、花を散らす風には吹くなと命じ、月を隱す雲には去れよといひ、傲慢な態度で自然を驅使しようとする。さて翫弄されるものは、小さいもの、美しいものである。現に「何も何も小さきものはいと美し。」(枕草子、うつくしきもの)といつてゐる。雄大、傀偉、森嚴、凡そその威力の人を壓し、その活動の人を恐れさせるものは、もとより翫弄すべきものでない。自然界に於て優美な贏弱な方面のみを愛するといふことは、奈良時代の人からすでにさうであつたが、平安時代になると、貴族等の氣風が益〻贏弱になると共に、それが一層甚だしくなつたばかりでなく、かういふ特殊な理由も加つてゐる。

特に狹隘で、優美で、かつ小規模である平安京の山水を天地として、それより外には出ることを好まなかつた當時の都人士は、山川の遊覽を興あるものとした奈良時代の人とは違つて、平素見なれてゐる小さい美しい自然界と少しでも樣子の變つた光景に接す

ると、殆どその前に戰慄するばかりであつた。枕ノ草子開卷第一に「春は曙」と書出した一節を見るがよい。すべてが小さく美しく優しいではないか。「怖しきもの」に「つるばみの笠。やけたる所。みづぶき。菱。髮多かる男の頭洗ひてほすほど。栗のいが。」のみを擧げたのを見ると、怖しいものさへ、小さいものばかりであるのに驚かれる。古今集以下の撰集を見ても、家集を讀んでも、その題材となつてゐるのは、花鳥の色と音とでなければ、美しい月の影、優しい蟲の聲々である。萬葉に見えるほどの山水の眺も、殆どなくなつてしまつた。その歌が春秋に多くして夏冬に少いのも、美しく優しい眺が春秋に多いからである。(和泉式部に(一)「世の中は春と秋とになしはてて夏と冬とのなからましかば。」といふ歌がある。)夏ならば(二)「階の下薔薇けしきばり咲きて、春秋の花盛よりも、しめやかにをかしき」(源氏)眺か、冬ならば(三)「雪高う降りて今もなほ降るに、五位も四位も、色うるはしう若やかなるが……紫の指貫も雪にはえて、濃さまさりたるを着て、あこめの紅ならずば、おどろおどろしき山吹を出して、からかさをさしたる」(枕ノ草子)美しさをのみ賞した。野分でさへも、源氏の野分の卷や、枕の「野分のまたの日こそ」の一節を見ると、凄じいより寧ろ美しい。平安時代の人は、何ものについても、優美な點をのみ見出してゐる。

(水蔭)

(一)和泉式部集卷二。
(二)源氏物語賢木の卷。
(三)枕ノ草子「君達は」の章。

ここに春秋の爭といふことがある。これは萬葉からすでに見えてゐることで、かの額田王の歌には秋を選んでゐる。平安時代になつては、伊勢物語に

雁なきて菊の花さく秋はあれど
はるの海べにすみよしの濱

の歌があるが、選擇の主意が明らかに說いてない。貫之は

(一)春秋に思ひ亂れてわきかねつ
ときにつけつゝうつる心は

(一)拾遺集雜の部。

(一)拾遺集雜の部。

と、どちらにも都合のよいことをいつてゐる。承香殿のとし子の

　おほかたの秋に心をよせしかど(一)
　　花見るときはいづれともなし

もほゞ同樣で、一應は秋に心を寄せたといふものの、その理由が明らかでない。たゞよみ人知らずの

　春はたゞ花の一重にさくばかり
　　もののあはれは秋ぞまされる

に至つて「もののあはれ」の一轉語を下して、秋に旗を擧げた。あはれといふからには、春よりも秋に人の心が動かされることが深いといふのであらうが、それは何故であらうか。源氏の薄雲の卷にその主人公が、

歲の內、行きかはる時々の花紅葉、空の景色につけても、心のゆくこともはべりにしがな。春の花の林、秋の野の盛を、とりどりに人

目移る

爭ひはべりける。そのころの、げにと心よるばかりあらはなる定めこそはべらざるなれ、唐にも春の花の錦に如くものなしといひはべるめり。やまと言の葉には、秋のあはれを取立てて思へる、いづれも時々につけて見給ふに、目移りて、えこそ花鳥の色をも音をも辨へはべらね。狹き垣根の內なりとも、そのをりをりの心見知るばかり春の花の木をも植ゑわたし、秋の草をも掘移して、いたづらなる野邊の蟲をも住ませて、人に御覽ぜさせんと思ひ給ふる。

といつた語がある。これにも春秋をいづれとも判斷してゐないが、「秋のあはれ」の成語を引いてゐるのに、秋草の色と蟲の音とを考へてゐることを注意しなければならぬ。春を飾る花鳥の色と音とに對して、秋の特殊な情趣を示すこの風物が「もののあはれ」を一入深く感じさせるものだとすれば、かの歌に、春より秋を選んだのは、爛

漫たる櫻の花の華やかなよりは、寧ろ萩やをみなへしのひたすらに優しく、小さく、女らしい弱々しさのあるのに、心がひかれたのであらう。春の花の一重に咲くばかりとして、それよりも秋を取つたのだから、千草の花の種々なのが、一層美しい故とも解せられるが、その千草の色には、春の花に求められない優しさと弱々しさとがあるのである。さうして、ここに平安時代の人の嗜好が現れてゐるのではなからうか。同じく秋を取つても、華やかな紅葉を手折らうとする額田王とは、理由の違ふところが看取される。

さて美しい小さい眺を愛する自然の傾向として、觀察は頗る細かくなつた。桃の木の若枝の多くさし出たのを「片方は青く、いま片枝は濃く艶にて、蘇枋（すはう）のやうに見えたる。」（枕草子）といひ、「いりはてぬる山際に光のなほとまりて明う見ゆるに、薄黄ばみたる雲のたなびきたる。」（同上）といひ、「明離るゝほどの黑き雲の、やうやう白うなり

きはやか　けざやか

ゆく」（同上）といふなども色の觀察、または「おほとなぶらはまゐらで、長すびつにいと多くおこしたる火の光に、御几帳の紐のいと艶やかに見え、御簾の帽額のあげたる鉤のきはやかなるも、けざやかに見ゆ。」（同上）といひ、「有明の月の、ありつゝもとうちいひて、さしのぞきたる髪のかしらにもより來ず、五寸ばかりさがりて、火ともしたるやうなる月の光。」（同上）といふ光線の描寫などの精緻な筆つきを見るがよい。細かい點をいふと、蚊の羽風さへ清女の筆にのぼつてゐる。これ等は宇津保に「朝の霞、綠の衣なり。夕べの雲、黃なる錦なり。」（春日詣）などとある漢文直譯流のものとは違つて、深切な實際の觀察から來たものである。源氏の風景の描寫は枕ほど纖細ではないが、その代り、いかにも生きてゐる。よくその風韻を寫し、全體としての情趣を髣髴せしめる手腕は、また格別であるといつてよい。たゞ清少納言は紫式部のやうに人情の微を穿つ眼がなかつただけ、目に

(一)承平五年二月十一日。

よこほれる

(二)山城國八幡なる石清水八幡宮。

とかくさだむることあり

見えるものの觀察は甚だ鋭敏である。それはこの女一個人の特長ではあるものの、やはり時代の生んだものであることはいふまでもない。

——文學に現はれたる國民思想の研究——

二五　都入

紀貫之

十一日。(一)雨いさゝか降りてやみぬ。かくてさしのぼるに、東の方に山のよこほれるを見て人に問へば、(二)八幡の宮といふ。これを聞きて喜びて、人々をがみ奉る。山崎の橋見ゆ。うれしきこと限りなし。ここに相應寺の邊に、しばし舟をとゞめて、とかくさだむることあり。この寺の岸の邊に柳多くあり。或人この柳のかげの川の底にうつれるを見て詠める歌、

さゞれ浪よするあやをば青柳のかげのいとして織るかとぞ見る

(一)山城國乙訓郡。

あるじす

紀貫之

櫻ちる木の下風はさむからで空に知られぬ雪ぞふりける

(二)「世の中は何か常なる飛鳥川きのふの淵はけふの瀬となる。」(古今集、よみ人知らず)

十六日。けふの夕つ方、京へのぼる序に見れば、山崎の店(たな)なる小櫃の繪も、まがりの法螺の形もかはらざりけり。賣る人の心をぞ知らぬとぞいふなる。かくて京へ行くに、(一)島坂にて人あるじしたり。必ずしもあるまじきわざなり。立ちて行きし時よりは、くる時ぞ人はとかくありける。これにも、それにも、かへりごとす。

紀貫之

夜になして京には入らんと思へば、急ぎしもせぬほどに、月出でぬ。桂川月の明きにぞ渡る。人々のいはく、「この川(二)飛鳥川にあらねば、淵瀬更に變らざりけり。」といひて、或人のよめる歌、

そでひづ

ひさかたの月におひたるかつら川
そこなる影もかはらざりけり

また或人のいへる、

天ぐものはるかなりつるかつら川
そでをひでても渡りぬるかな

また或人のよめる、

かつら川わがこゝろにも通はねど
おなじ深さにながるべらなり

京のうれしきあまりに、歌も餘りぞ多かる。夜更けてくれば、ところどころも見えず。京に入りたちてうれし。家に至りて門に入るに、月あかければいとよくありさま見ゆ。聞きしよりもまさりて、いふがひなくぞこぼれ破れたる。家をあづけたりつる人の心も荒れたるなりけり。中垣こそあれ、ひとつ家のやうなれば、のぞみてあづか

志をばせん

れるなり。さればたよりごとに、ものも絶えず得させたり。今宵かゝることと、聲高にものもいはせず、いとはつらく見ゆれど、志をばせんとす。

さて池めいて、くぼまり水つける所あり。ほとりに松もありき。五年六年のうちに、千年や過ぎにけん、片枝はなくなりにけり。今生ひたるぞまじれる。大かた皆荒れにたれば、あはれとぞ人々いふ。思ひ出でぬことなくこひしきがうちに、この家にてうまれし女子も、もろともに歸らねば、いかがは悲しき。舟人も皆子抱きてのゝしる。かかるうちになほ悲みに堪へずして、ひそかに心知れる人といへりける歌、

うまれしも歸らぬものをわが宿に
小松のあるを見るがかなしさ

とぞいへる。なほあかずやあらん、またかくなん、

見し人を松のちとせに見ましかば
とほく悲しきわかれせましや

忘れ難く、口惜しきこと多かれど、えつくさず。

——土佐日記——

二六　一系の天子

元日や一系の天子不二山の　鳴雪

鳴雪

人に死し鶴にうまれてさえかへる　漱石

馬市のまぐさとびちる春の風　露月

母びとの假名がきうれし種俵　蝶衣

初雷に桃下の鷄のまなこかな　癖三醉

桃散るやもやしの三葉風わたる　六花

五月雨や鴉草ふむ水の中　碧

藻の花にイむ鷺や向岸

永き日のすでに月出づゆふ雲雀　紫影

碧梧桐

月によろし風によろし竹の植ゑ所　松宇

宵鵜飼はてたる月にあそびけり　碧童

防風の霞む夜頃や濱どまり　青々

藻の花やあしの中行くひとながれ　水巴

子規

よしきりの一湖を領す高音かな　小波

ひよこども浴びよ木かげの砂すゞし　素琴

口あいて佐渡が見ゆると涼みけり　紅葉

炎天の小さきつむじや豆ばたけ　井泉水

早稲は花のあかつきの露笠涼し　竹冷

戸ごとひくかけひ溢れつ柿の晴　山梔子

岩づたふ水に日のさす野菊かな　句佛

乙字

峯の線さやかに赤城秋晴れたり　乙字

園の戸をがたんぴしやんと秋の風　杷栗

鹿笛の一つは谷に下るらし　繞石

語草すでに盡きぬる夜長かな　四方太

遠山に日のあたりたる枯野かな　虚子

野分すや吹きいだされて龜一つ　鬼城

水ともに白魚はかる小枡かな　東洋城

甘栗のあまき匂や夜の雪　瓊音

二七　生の象徴としての短詩

岩城準太郎

「いづれの年よりか片雲の風にさそはれて、漂泊の思やまず……春立てる霞の空に白河の關越えんと、そゞろ神のものにつきて心を狂はせ、道祖神の招にあひて、取るもの手につかず。股引の破を綴り、笠の緒つけかへて」千里の旅に上つた俳人の生活は、まことに澄みきつた碧い深い空に、油然と湧出た一片の雲が、吹送る天つ風に乘じて、飄々と動き去るが如き生活である。目もはるに草の花咲く大野をかけて、悠々と流れ來り流れ去る長江の水が、積翠をひたし深紅に染み、淵と淀み瀬と走つて、日夜停ることとなきが如き生活である。心を月花にして禽獸を離れることに努めたこの俳人は、身も

矚目

(一)「おひも太刀もさつきにかざれ紙のぼり。」（奥の細道）
(二)「夏草やつはものどもが夢のあと。」（同上）
(三)「荒海や佐渡に横たふ天の河。」（同上）
(四)「山中や菊は手折らぬ湯のにほひ。」（同上）
(五)「風流の始や奥の田植歌。」（同上）

また月花になつてゐる。生活それ自身が渾然として月花になりきつてゐる。この透徹した心境、渾成した生活、これをぽつりぽつりと作品にする。その作品は、啻に外界矚目の事象を諷詠しただけに止るものでない、すべてこの俳人の「生」そのものの暗示である。

彼はその生を連句にうちこんで、陶々の味はひを豊かにふつくりと表してゐると同時に、更に彼の獨自の生の味はひを、寂しくも、またしみじみと發句に託してゐる。叙事の句だの、抒情の句だの、客觀の句だの、主觀の句だの、自然の句だの、人事の句だのといふやうなことは、ここに用はない。(一)五月の節供が詠んであらうと、(二)古蹟の感懷が歌つてあらうと、(三)天の河が出ようと、(四)溫泉宿が持出されようと、すべてこれ等は事物そのものを諷詠しただけではない。直ちに作者の生をつかみ來つて、これを暗示したものである。

(五)奥の田植歌に風流の旅を始めて、北邊の夏草に轉變の人の世を

(一)「閑かさや岩にしみ入る蟬の聲。」（同上）
(二)越前で門人金澤の北枝に別れる時の句「もの書いて扇ひきさく餘波かな。」（同上）
(三)滋賀縣石山の國分寺にある僧庵。芭蕉の住まつた所。

觀じ、(一)岩に浸入る蟬の聲に限りない靜寂を身にしめたこの俳人は、秋夜の天の河に孤獨の眼を凝らし、別離の哀愁に(二)扇ひき裂く切なさを見せた。わけて齢傾く五十一歳の年に、割合に老けて見える弱弱しい體で、(三)幻住の庵を去り、故郷に墓を展し、更に奈良に過ぎり難波に入つて、とうとう死病にとりつかれた一年間の旅路の發句は、作者の到達した生の光耀を、寂しい喪服で包んでゐるかの感じを起させるものである。味はへば味はふほど、にじみ出る詩境の感味は、これ等の暗示的な短句から汲取られる。

かうした見方からいへば、短詩は生を象徵する文學である。短詩も描寫や叙述をする。記載や説明をしないでもない。しかしながら、これを以て唯一の使命とする文學ではないのである。當面に取りあつかはれてゐる題材は、より大なる事物の焦點をなすものであり、より廣い事實の中心をなすものである。廣い大きな世界がその

(一)元祿七年十月九日の句。

背後に展開され、或は圓光を作り、或は暈を現出する。俳句などはこの種の文學の中で、最も特色的のものである。

「(一)旅に病んで夢は枯野をかけめぐる。」と詠んだ蕉翁の句は、たゞ旅中の病篤きをいつただけではない。夢中の幻覺をいつただけではない。夢中に枯野が見えたといふ事實をいつただけでもない。旅に病むといふことそれ自身が、深く作者の生活に相關るものであり、生活全體の特異な色彩を代表するものである。五年以前に江戸の草庵を出る時、すでに「船の上に生涯をうかべ、馬の口とらへて老を迎ふるものは、日々旅にして旅を棲所とす。古人も多く旅に死せるあり。」としみじみいつてゐる。五年後の今日、このことに出會はした心持は、意外の變事に驚く心持とは大きな徑庭がある。まして枯野はたゞ偶然に見えた夢中の景だけでない。蕭殺の風吹きわたる天地に、晴るれば短日の光弱く、雨ふれば冷たくしぐれる。花野枯れつ

くして、尾花だけが名殘の白芒、ぼやけた姿で靡き立つてゐる。池の水鳥翼を収めて、空林に朝霜が白々と置く。こんな光景が枯野一語によつて直下に想ひ起される。即ち枯野は冬季に於ける自然人事の全體を背景に展開する力を有つてゐる焦點的題材である。しかもその枯野は作者の生活、作者の世界、作者の全人格をさへ彷彿せしめるいみじくも妙なる内容をもつてゐる。蕉翁の生はまさしくこの一句に取りあつかはれた題材によつて暗示されてゐる。

蕉翁の作を年代順に見て行くと、その生の足跡を生き生きと想ひ浮かべることができる。病篤くなつて、門人が辭世の句を問うた時、古池の句に眼を開いてからこの方、作るところの句一として辭世でないものはないと答へた彼の言葉は、彼の一生と彼の作句とにあつて、始めて權威を認めることができるのである。

——國語と國文學——

柿本人麿　岩佐勝以筆

(一)天武天皇。(二)鎌足。

國見

二八　萬葉集の歌

天皇(一)詔内大臣(二)藤原朝臣、競憐春山萬花之艶、秋山千葉之彩時、額田王以歌判之歌

冬ごもり、春さりくれば、なかざりし鳥も來鳴きぬ、さかざりし花も咲けれど、山をしみ入りても聽かず。草深みとりても見ず。秋山の木の葉を見ては、もみぢをば取りてぞしぬぶ。青きをば置きてぞ歎く。そこし恨めし秋山われは。

吉野宮に幸ませる時　柿本人麿

安見しゝわが大君、神ながら神さびせすと、吉野川瀧つ河内に、高殿を高知りまして、上り立ち國見をすれば、たゝなはる青垣山の、山神の奉る御調と、春べ

は花かざし持ち、　秋立てば紅葉かざせり、　夕川の神も、
大御食に仕へまつると、　上つ瀬に鵜川を立て、　下つ瀬
に小網さしわたし、　山川もよりて仕ふる神の御代かも。

反歌

山川もよりてつかふる神ながら
たぎつ河内に船出せすかも

望不盡山歌　　山部赤人

天地のわかれし時ゆ、　神さびて高く貴き、　駿河なる富
士の高嶺を、　天の原ふりさけ見れば、　わたる日の影も
かくろひ、　照る月の光も見えず、　白雲もい行きはゞか
り、　時じくぞ雪はふりける。　語りつぎいひつぎ行かん、
富士の高嶺は。

反歌

まなかひ

田子の浦ゆうち出でて見れば眞白にぞ
　ふじの高嶺に雪はふりける

思子等歌　山上憶良

瓜はめば子ども思ほゆ。栗はめばましてしのばゆ。いづくより來りしものぞ、まなかひにもとなかゝりて、安寢しなさぬ。

反歌

白金も黄金も玉もなにせんに
　まされる寶子にしかめやも

柿本人麿

あしびきの山河の瀬の鳴るなべに
　ゆづきが嶽に雲たちわたる

志貴皇子

いはばしるたるみの上のさわらびの
　もえいづる春になりにけるかも

山上憶良

おくららは今はまからん子なくらん
　そのかの母もわをまつらんぞ

自修文

二九　民謠の話

島木赤彦

日本民族には、太古から日常の感情を歌謠にうつして、自ら口に歌ひ、かつまた對者と唱和するといふ風があつた。それ等の民謠の中で、或特別な形式を備へたものは、移つて短歌となつて、かの萬葉集時代に於ける大發達をなした。然るにこの萬葉集時代に緊張の頂點にまで達した短歌が、古今集以後の勅撰集に至つて、著しく弛緩の狀態を現したといふことは、一面奇異な現象のやうに考へられるが、それは決して奇異ではないのである。

空疎　とぼしいこと。

萎縮　なえちゞむこと。

勅撰集時代　醍醐天皇の時勅して古今和歌集を撰せしめられた頃から、後花園天皇の新續古今集までの勅撰集の間をいふ。その間五百三十餘年間。

神樂歌　神樂に和して歌ふ歌。

催馬樂　雅樂の一。初め奈良時代の民謡で馬方の歌つたものであるが、平安朝以後歌曲としたのである。

古今集以後の和歌といふものは、萬葉集の歌の如く、傳統的に民衆心理から生みだされた歌ではない。民衆とかけ離れた一部貴族社會の玩物であつて、そのでき方も、緊張した感情から生みだされるといふよりも、外形を整へるに苦心して作りだされたもので、内面の空疎と萎縮とは、當時の歌人の思はぬところであつた。故に私は、萬葉集の精神は決して勅撰集には傳はらずに、却つて短歌の形を存してゐないその當時の民謡に存してゐると信じてゐる。民衆の心理から生まれた短歌の精神が、民族的歌謡の一分流であるところの民謡に合流してゐるといふことは、決して不自然ではない。

　この事は、勅撰集時代の、その背後に存してゐたと思はれる神樂歌や、催馬樂歌等の中に現れてゐる民謡を檢べて見れば、容易にうなづくことができるのである。

　笹分けば袖こそ破れめ利根川の石は踏むともいざ河原

しながどり　（息長鳥）かいつぶりのこと。猪名の枕詞。

若草の　妹の枕詞。

惻々　心のかなしみいたむさま。

より。

　しながどり猪名の湊に入る舟の、かぢよくまかせ、舟かたぶくな、若草の妹も乘りたり、我も乘りたり。

といふやうなのは、ほんの一例に過ぎぬが、この民謡から採つたと思はれる神樂歌や催馬樂歌を以つて、古今集以下の勅撰集に比べても、その系統が萬葉集に通じてゐることは明白である。そして、この民謡の系統は、足利、德川の各時代を經て、順次に發達推移して、今日に及んでゐるのである。

　然らばそれ等の民謡の生命となつてゐるのはなんであらうか。それはやはり、民衆の苦しい生活が自然に産みだしたところの、惻々として人の心を動かす力を持つ情調である。農民の唄ふ歌謡には、のん氣に似て、その底には重々しい調子がこもつてゐるし、船頭唄や馬子唄には、多くは漂泊の遣瀬ない哀音がこもつてゐる。

（一）大島の西北端。
（二）信濃と上野との國境に跨がる活火山。
（三）長野縣北佐久郡にある町。もと中仙道と善光寺道との分岐點であつた。
（四）群馬縣碓氷郡にある町。碓氷峠の東麓。
（五）東山道を經て江戸から京都へ行く街道。

　　乳（一）が崎冲まぢや見送りましよが、それから先は神だのみ。
　　（伊豆大島）

の唄の如き、必ずしも船唄とばかりはいへぬが、海中の孤島に頼りなく住む人々の心理が「神だのみ」の哀音となつて現れてゐる純粋さを味はふべきである。

　　淺間（二）の煙が北へと靡く、今宵泊らにや雨になる。

一誦して淺間の山裾から碓氷越をして、北國街道を往來する馬子の唄であることがわかるではないか。淺間の裾野には追分（三）の宿場があり、碓氷峠の下には坂本（四）の宿驛があつて、いづれも中仙（五）道の旅人の一夜の泊場であつた。そこの宿引の女が旅人を呼びとめて、一宿を勸める心がこの歌の心である。一夜の宿を勸める歌謠を、勸められる旅人や馬子が自ら唄つて、自分の境遇を辛うじて慰めてゐるところが、哀な漂泊の心である。年が年中、馬の鈴を鳴らして、上るは碓氷の坂、下るは輕井澤、追分の曠野である。

見上げる空にはいつも淺間の山の煙が靡いてゐる。煙は多く南へ靡く。風が北になれば日は晴れる。煙が北へ靡けば、あすの日和は雨となる。「今宵泊らにや雨になる。」は、この嶮坂を上下する脚絆草鞋の身には、決して戯れの問題ではないのである。

　　麥ついて、夜麥ついて、お手にまめが九つ。九つのまめを見れば、親里がこひしや。

麥をつくは農家の新婦である。嫁して幾ばくならず、家人の心も知り難く、起臥にいとど落着かぬ心がある。父母の愛娘として、掌中の玉であつた優しい身も、今は夜麥をつく。夜麥をついて掌にできたまめを眺めて、親里を思ふ心の痛切さは、恐らく人麿、貫之の秀歌にも勝るものがあらう。

これ等の唄は、その生活から唄はれてゐる。その職業や境遇の生む情調が叙べられてゐる。そして、その民謠としての生命も、全くその中にあるのである。

かゝる職業的個性の心理や感情を現す民謡ほど、それがまた地方的の個性を表現してゐるといひ得る場合が多いやうである。土を離れて人なく、人の個性は少くも土の個性を離れることはできない。その土地の持つ情調が、その土に住む生活から唄はれた民謡に、強い影を投ずることは、誠に自然の現象である。「乳が崎沖まで」の唄が島に生まれ、「淺間の煙」の唄が信濃高原に點在する宿驛の間に生まれ、「麥ついて」の唄が伊豆南方の田舍に生まれてゐることを考へ合はせると、民謡と地方との關係をほゞ推測することができよう。たゞ民謡の優れたものは、それが口うつしに他の地方に傳はり易いから、それが土地なまりを加へて、いづれの唄がいづれの地に發生したかを見分け難いことも少くない。しかしながら、よし轉訛したとしても、その唄も土と人とを離れて行はれぬから、その轉訛に自ら地方的個性が現れてくる。例へば「麥ついて」の歌は甲斐の南方では、

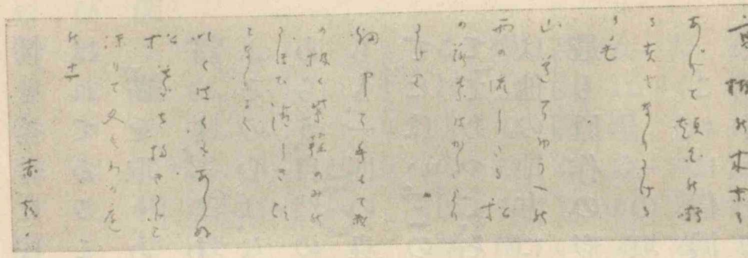
大麥ついて、麥ついて、お手にまみよ九つ。
九つのまみよ見れば、親の在所こひしよ。

と唄うてゐる。伊豆南方の暖地と、自然にその調子と響とを異にしてゐるのが味はゝれる。

この苗をとりあげて、どこに棲まずや。いなごや。きりすゝき、すすき葦の、こやのうらに棲まずや。

これは伊豆の南方の稻生澤村(一)の苗取唄である。思ふにこの歌謡は、決して近代のものではない。少くとも平安時代か、或はそれ以前に生まれたものが、その優れた秀でた調子を持つが爲に、南方の邊土に今日まで轉訛しながらも生命を存してゐるのである。歌體が幼くて、哀憐の心が充ち滿ちてゐる。この美しい心

高つきの木末にありてほゝ白のさへづる春となりにけるかも
山道にゆふべの雨の流したる松の落葉はかたよりにけり
はた中に手もて我がこく紫蘇の實のにほひすがしき頃となりにし
いくばくもあらぬ松葉をはきにけり凍りて久しわが庭の土　赤彦



島木赤彦筆蹟

(一)賀茂郡。下田町の近傍。

(蝗)

(一)信濃と甲斐との國境。

情を持つた民謡が、今日の日本に殘つてゐて、現在農夫の口に歌はれてゐることは、民族の誇とするに足ると思ふ。

「苗を取りあげた後は、いなごよ、お前はどうするのか。刈つたすすきや、結きあんだ萱の小屋の中に、自分と共に住まなゞか。」といふその心は、なんといふ單純な、同情のこもつた、愛に滿ちた心であらう。自然の中に愛に包まれて、その日の勞動をいそしみながらも、一匹の蟲にも親しい心を持つ農夫の生活が、涙ぐましいまでに尊い。「この苗をとりあげて」は、原作は勿論「この稻を刈りあげて」であつて、それが苗取歌に轉用されたものと思はれる。この唄は他の地方にも殘つてゐるが、歌の體から考へて、伊豆のものが最も原作の形を保存してゐると想像される。

一の坂越し、二の坂越して、三の坂越しや強清水。

これは信濃國の民謡中、出色の一である。草刈馬に乘つて、八ケ(一)嶽の裾野を上る。一の坂がある。二の坂がある。坂を上るうちに汗

が背に流れる。三の坂を越せばそこに清水が湧いてゐる。齒に冷たくしみ入るほどの強清水が湧いてゐるといふ意で、草刈の男女に唄はれることによつて、この唄の趣が深い。そして、どこかに高山國らしい調子が現れてゐる。暖地の濕潤に對して、山國は乾燥してゐる。南の明るさは暖かいが、山國の明るさは寒い。それが、これ等の民謡の中にも現れてゐるのである。

三〇　四季小品

一　春雨

中島廣足

萱ふける軒は、雨の音靜かにて、池水のあやこまやかなるに、いと深う霞める梢より、つばさしをれたる鳥ども、そこはかとなく飛びわたるなど、いといたうをかし。暮れぬれば、ましていとしめやかにて、見る書さへ今ひときは心しみぬ。風少し吹出でて、燈火のまた

照る日かけろふ

たきたるに、何とも知らぬ花の香の、ほのかにうちかをりたるなどもをかし。

——橿園文集——

二　風鈴

香川景樹

月の晴れわたり、花の散行く時々を告ぐる、いとあはれなり。かの入相、曉うち定めたるたぐひならんや。まして水無月の照る日かげろひて、竹の若葉、松の葉末、そよめき出でし夕暮に聲あはせたる、ものにも似ず。

三　きぬた

清水濱臣

近しと聞けば遠し、遠しと聞けば近し。しきるもたゆみ、たゆむもまたしきる。雁がねの聲のきぬたを誘ふにやあらん。きぬたの音の雁がねに通ふにやあらん。あなあやし。あなあやし。そもそもこの音の悲しきか。住む里の寂しきか。打つをりの憂き故か。皆あらず。聞く人の心の寂しきなり。

——泊洦舍文集——

四　秋の山田

藤井高尚

秋の山田は夜こそ殊に寂しきものの、さすがにをかしくはあれ。あやしの小屋に賤の男が起きゐて、ひた引きならしつゝ鹿猿を驚かし、谷水の流にかけたるひたの、おのれと音するなど、とりあつめてあはれなること多かり。かく心をつくしてもるとはすれど、曉近うなりては、うちまどろむにやあらん、ものの音なひもたえだえなれば、小屋近く鹿のより來つゝ、何のかひよとうちなきたるは、いぎたなさをいさめ顔なりや。

——松の落葉——

三一　古文學に見えた祖先の面影　その一

奈良時代以前のおもな文學は、古事記日本紀の中に在る百八十餘首の歌と、延喜式の中に在る祝詞とである。祝詞は神に祈る詞であるが、その中最も文學的價値のあるものは、大祓詞と祈年祭詞と

（薦）

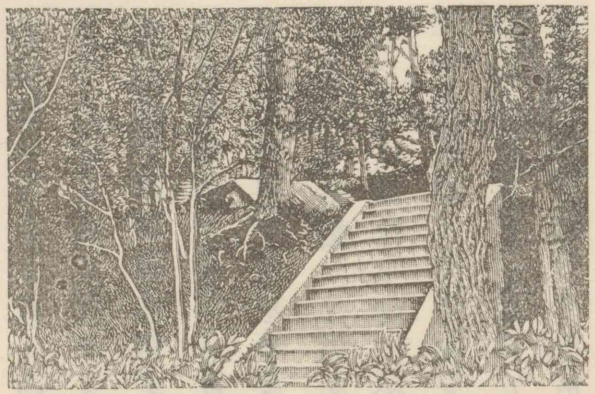
（髻華）

であらう。祝詞を見ると、わが國民が罪穢を忌み、清く直きを愛したこと、神を敬ひ平和を愛したことがわかる。

古事記、日本紀の歌の例として、たゞ一つ日本武尊が臨終の御歌を引かう。

いのちの　全けん人は　たゝみこも　平群（へぐり）の山の
くまがしが葉を　うずに挿せ　その子

これは尊が伊勢の能褒野で薨（みまか）り給はんとする時、遙かに故郷の大和を思ひやつて歌はれた思國歌（くにしのびうた）である。歌の大意は「我は今病の爲に、旅の空に寂しくはてるのであるが、それにつけても故郷の汝等を思ふの情に堪へぬ。あはれ故郷の命全く身の健かならん人よ、むかしわが汝等と共に取つてかざして遊んだあの平群の山のくまがしの葉を髪飾として樂しく遊べよかし。わが愛する故郷人よ。」といふことであらう。



日本武尊能褒野陵

旅路に悩み死に臨んで故郷をしのぶのは人情の自然で、珍しくもないが、毒氣に中り、恐しい苦悶を重ねて死ぬる間際に「遙かなる故郷人に語を寄す。命全けん人は、平群のくまがしをかざし、陽氣に遊んで人生を樂しめかし。」といはれた御心持はどうであらう。この樂天的、積極的、向上的、光明的な勇ましい氣象は、いかにも有難いものではないか。

日本武尊はいろいろな點で、大和民族の固有性を備へて居られた方であつた。性質は極めて聰明で、そして、武勇は絶倫であつた。熱したら矢も楯もたまらぬ多血性で、兄君をつかみひしいで、こもに包んで投棄てるといふ亂暴をされるがそれでゐて、君

父の命には從ふといふ優しいところがあつた。東西の兇賊を手もなく平げられる武勇があつて、それで姿はといふと、女裝すれば川上梟帥の目をも欺く美容があつた。人を信じて、群る夷の間に直往して火攻に逢ふ。劍でその火を薙返して夷を鏖にする。伊勢では、「熊襲を漸く平げた私に、すぐ蝦夷征伐の勅命のあるのは、父帝が死ねよとの御心でありませうか。」と叔母命に泣いて語られたが、やがて涙ををさめて夷を平げられる。死なうといふ間際に、達者な人は遊び樂しめと勸められる。いろいろな積極的性質のおもしろく調和した、實に愉快な御性格ではあるまいか。

日本武尊は世に在した時は、自ら「わが心常には空よりも翔り行かんと思ふ。」といはれたが、薨れまして後は、白鳥となつて、威勢よく美しく天に翔つて行かれたと申すことである。くまがしに白鳥。私はこの二つが大和民族の堅實な性質と、清潔、優美を愛する性質と、

足下を固める着實性と、高きに憧れる向上心とを表す標章として、實にふさはしいものと思ひ、さうして、これが日本武尊といふ上代の代表的英傑に繫がつてゐることをおもしろく思ふ。日本の國民性が凝固つて、日本武尊となつたのではないかと思ふ。

三二 古文學に見えた祖先の面影 その二

次に奈良時代の文學を代表すべき作物は、古事記と萬葉集とである。古事記は神代の大昔から推古天皇に至るまでの言傳を筆記したもの。萬葉集は奈良時代の歌人の作を中心とした歌集である。さうして、二つともに昔の日本民族の純な面影を見るべき古文學の寶典である。古事記の趣を示す一例として、須佐之男命が高天原に上られた時に、天照大神が命を待ちつけて詰問される一節を引かう。

「山川悉に動み、國土皆震りき。ここに天照大御神聞きおどろかして、あがなせの命の上り來ますゆゑは、必ず善しき心ならじ。あが國を奪はんとおもほすにこそと詔り給ひて、即ち御髮を解き御みづらに纒かして、左右の御みづらにも、御かづらにも、左右の御手にも、各八尺の勾璁の五百津のみすまるの珠を纒持たして、背には千入のゆぎを負ひ、比良には五百入のゆぎを附け、またいつの竹鞆を取佩ばして、弓腹振立てて、堅庭は向股に踏みなづみ、沫雪なす蹶散かして、いつの男建び踏建びて、待問ひ給はく、何故上り來ませると問ひ給ひき。」

大意は、須佐之男命は山川國土を震動させて、天照大神御領の高天原に上つて來られた。大神は聞し召し驚かせられて、弟の命が恐しい權幕で上つてくるのは、きつと善意ではあるまい。察するにわが國を奪はんの下心であらうと仰せられて、早速凛々しい男裝に改めさせられ、髮を解いて角髮に結び、左右の御角髮にも、御かづらにも、左右の御手にも、玲瓏燦爛たる勾玉を緒に通したのを纒うて、輝くばかりに裝はせられた。なほ武器には千本入、五百本入のゆぎを前後につけ、左手の臂には立派な鞆を佩び、弓腹を振立てて、堅い庭に向股まで踏みぬかんばかり力足を踏張り、土くれをば沫雪の如く蹴散らかして、御稜威あたりを拂ふ御武者ぶるひゆゝしく、居丈高に立ちはだかつて、命の見えるを待ちつけて、何故の入國ぞと問はせられた。」といふことである。土から掘出したやうなうぶな趣と、鐵のやうな強い力と、花のやうな優しい美しさとが、微妙に調和してゐるやうに思はれる。天照大御神の氣高い、勇ましい御姿が、雄壯剛健な大文字の中に躍動してゐるやうに思はれる。

我等の祖先の面影の古文學に見えた趣は、まづこのやうなものであつた。

——五十嵐力「作文三十三講」による——

居丈高
立ちはだかる

國民歌

(一)聖武、孝謙兩朝に仕へて中納言持節征東將軍となつた。萬葉集の撰者として傳へられる。延暦四年(一四四五年)歿。

三三　日本文學

優美閑雅な日本語を使つて、平和柔順な國民が歌つた歌、それには長歌も短歌もあるが、これ等の歌が日本文學の基礎といつてよろしい。四圍の美しい自然を歌つて、人事もすべて自然の譬喩に寄せられて居ることが、早く後世の文學の特質を示して居る。古事記、日本紀の歌、萬葉集の歌等は即ちそれ等の國民歌の幾分かを傳へたもので、推古以來支那の文明が傳はつて、だんだんと漢文漢詩が用ひられるやうになつても、日本固有な歌は、それとは別途に發達した。殊に上代からの神祇を祭る詞、祝詞の形式を應用して、寧ろ漢詩に對抗して、特殊な國民思想を歌つたのが、柿本人麿、山部赤人等の先輩歌人で、續いて奈良時代の大伴家持(一)等である。萬葉集には漢文渡來以前の歌も多く載せてあるが、かういふ新進歌人等の歌も

文藻

多い。優美典雅といふ點に於て、忠君愛國の思想に於て、よく日本國民の上代思想をあらはしたものである。

山部赤人(藤原信實筆)

奈良時代にできた萬葉集は漢字を以て記された。漢字の音訓を用ひて、日本語を記したものである。

平安時代になつて百年の後には、假名の發達があつて、平假名で自由自在に國語を記すことになつた。ここに於て、假名文の發達が著しくなつた。萬葉集の後をついで古今集以下の勅撰和歌集ができたのみでなく、竹取物語、伊勢物語を物語の祖として、數多の假名物語、日記、隨筆の類が現れた。就中有名なのは紫式部の源氏物語と、清少納言の枕草子とで、漢學の素養がその文藻を助けたことは見逃されぬことで

叙事詩

諸行無常 愛別離苦

あるが、上古以來行はれた和歌の風流情味が、常にこれ等の文學の背景となり、基礎となつて居るのも、爭はれぬ事實である。大鏡や、榮華物語などいふ史實を記した物語も、つまりはその材料を一轉化したものである。奈良時代の和歌即ち抒情詩が、平安時代には物語即ち叙事詩と發達したのである。

鎌倉幕府の創立と共に、時代は一變した。隨つて文學も一變した。源平二氏の爭が材料に採られた保元物語や、平治物語や、平家物語や、源平盛衰記などといふ軍記物語が、佛家の諸行無常、愛別離苦の思想の下に筆述された。降つて吉野朝廷の頃の太平記も、同じく軍記物語である。平安時代の盛時とはその材料に於てこそ、それぞれ差別はあれ、叙事詩たることは同樣である。材料の變化と共に言語も變化して、漢語及び漢文脉の加つて來たことは、自らその內容と外形との調和を保たしめて居る。徒然草、方丈記なども、佛教の盛な

劇詩

世話材料

この時代の著名な産物として數へられる。

足利將軍の世は、概して戰亂時代で、無學の世と稱せられて居るが、明朝との交通も繁く、繪畫をはじめ美術工藝の進步も著しく、鎌倉の末からの進步を承けて、將軍義滿の頃に至つて、能の發達大成を見るに至つたのは、大いに注意すべきことである。平安、鎌倉二時代を通じての叙事詩は、ここに至つて劇詩の形をなしたのである。能は幕政時代を通じて衰へず、今日にも傳はつてなほ盛であるのを見ても、いかにそのわが國民の嗜好に投じたものであるかがわかる。その材料としては、上代の萬葉集から、中古の古今集、伊勢物語、源氏物語等は勿論、平家物語、源平盛衰記、また義經記、曾我物語などの軍記物語に及んで居り、また世話材料も入れてある。歌ふ方からいつても、音樂の方からいつても、舞の方からいつても、できるだけ當時の粹を拔いたもので、寧ろその精華を集めたものといつても

集大成す

飜刻

俗文學

樂天洒落

(一)德川第五代將軍。

(二)德川第十一代將軍。

よい。あらゆる藝術の方面を集大成したものとして、當時の武士の修養に資したことは多大であつた。

德川時代に至つては、學問の復興から、漢學が更に唐宋時代の精華を學んだのは勿論、儒學に於ては、支那に於ても稀なほどな大儒が輩出した。また國學の研究も盛になつて、久しく忘れられてゐた平安時代以前に遡つて、萬葉集も研究され、源氏物語も研究された。印刷の方法が進んで、古書の飜刻が盛になつて、庶民皆太平の世を樂しんで、靜かに文學を翫味する餘裕を得た。漢學、國學の勃興につれて、專ら平民社會に行はれたいはゆる俗文學が發達した。淨瑠璃や、小說や、俳句や、狂歌や、川柳やが、和漢古今の文學に根ざして、新しい國民思想の花を咲かせた。昌平時代の樂天洒落な氣風と、義理人情に勇み立つ犧牲的精神とが、これ等の各種の文學の上に溢れて居る。(一)綱吉將軍の元祿時代と、(二)家齊將軍の文化文政時代とが、その最

咀嚼

大繁盛な時世であつた。淨瑠璃の近松門左衛門、俳句の芭蕉は元祿の世に屬し、小說の曲亭馬琴は文化文政の世に屬する。その他の作家は數限りもない。平民社會の嗜好に投じようとした爲、中には材料思想に鄙陋なものの少くないのは遺憾である。演劇の發達の著しかつたことも、注意すべき事がらである。かやうに平民文學の發達したのは、一面に於て平民社會の勃興を意味するので、日本の國民が東洋の諸國中、明治大正の御代を待つて大いに世界に活躍するといふ氣運が、すでにその上に示されて居るやうに感ぜられる。

維新以後の進歩は、ひたすら西洋文學の新味を加へたことで、東西文明の融和は、わが國文學の上に於ても、いち早く認められるのである。最初は平易な英文の小說、詩歌の飜譯から始つて、次第に佛、獨、露、瑞諸國の文學を咀嚼するに至り、歐米の新思潮は抒情詩、叙事詩、劇詩の各方面にわたつて、常に新しい傾向生命をわが文學の上

扞格す

に及しつゝあるのである。上古以來の國文學の研究も益〻盛になつて、一層根柢あり、權威あり、價値ある文學の興るのは、近き將來に期待さるべきことである。但し新奇を競ふの餘り、往々わが國體と相容れず、わが國民性と扞格する思想の輸入されることもあるので、その間の調節は大いに考慮しなければならぬのである。

自修文

三四　一莖の花も風雨を凌がざれば咲かず

小川未明

無線電信が成功した今日になつてこそ、線を有しなければ音信のできないのを、多少まはりくどいやうに感ずるけれど、線なくして通信されることをば理想とした時分には、いかにそれが空想に近いことかと思はれたに違ひないばかりでなく、僅かに一本の針金を通じて千萬哩の彼方に通信のされることを驚異

に等しい事實だとして、文明のここに至つたのを感謝したか知れないのであります。

凡そ一つの理想が實現されるまでには、或期間の努力と、苦心と、失敗と、種々な經驗とを重ねなくてはならないことは、獨り形を有する事物の上ばかりでなく、思想や道德の上に於ても同じことであると、いひ得られるのであります。

旅客が駕籠に乘つて嶮しい峠を越えた時から、汽車となり、やがて飛行機とならうとしてゐるまでの文化の推移について考へる時、私たちは自然に文明が發達して來たものと思つてはならない。例へば、いかにして汽罐車が發明されるに至つたか、一つのトンネルを掘るにも幾何の人命を賭してなさなければならなかつたか、そして、今日なほ飛行機をより完全なものとする爲には、この後幾何の獻身的な冒險が重ねられなければならぬかが豫想される時に、この文明は決して人間の努力と熱心となし

には、一歩も進むことができなかつたことを覺るでありませう。物質の上に或變革を來たして、それをより便利なものとする爲には、發明の苦心と、それに伴なふ多くの困難とがある如くに、これまでの因習や、風俗や、思想を改めて、人間生活の上に、より明るみと希望とを持來たす爲には、またどれほど保守的な思想と戰はなければならぬか、思半ばに過ぎるものがあります。

例へば、衣服の改良の如き、家屋の改良の如き、ちよつと思つただけでは、容易にできさうな事がらでも、すぐといふわけにはいかないことは、私たちがすでに親しく知り得るところであります。改良された方がより便利で、かつ經濟的でもあるに拘らず、人間はまた一面に保守的な心をも抱くのであります。

何事も人間性の複雜なことを解しなければ、この矛盾についても、また覺ることができない。眞理が直ちに眞理として萬人に承認され、そして實行されるならば、新舊両思想の衝突もなければ、悲劇の起らうはずもないのであります。物質の上に於て、思想の上に於て、何事によらず一點から他の一點へ移行するのは、決して容易なことではないのであります。

況んや舊時代の思想も、その當時に於ては、人間生活の上に絕對の權威を有するものであつたからです。それはちやうど、汽車のない時代にあつては駕籠が唯一のものであり、たとひ將來に於て汽車が發明される可能を有したとしても、なほそれが希望たり理想たるに過ぎない間は、駕籠を乘物として絕對だと信じたことに對して、なんの不思議もないのであります。

德川時代にあつて、女子が「女大學」(一)に表された道德を金科玉條として服膺したことは、實にこれによつて人間生活の最高所にまで自分を引上げようとした、向上的努力であつたことは、疑ふことができません。

武士道が當時最高な道德であつたといふことも、同じ理由か

(一)書名。一卷。貝原益軒の撰ともいふ。女子修身の要義が說いてある。
金科玉條　最も貴重なさだめ。

超人間的　人間以上。人間を通り越した。

究理心　事物のみちをきはめる心。

らであります。容易にはなされない克己、果斷、廉恥、勇氣、すべてを超人間的の極點にまで引上げて、生活を理想主義化さしたものであることは、容易に考へ得られることです。これをもたゞ階級心理の變形に過ぎないと見てしまふのは、人間から全く精神的の飛躍を無視したものといはなければなりません。

しかし、時代がひと所にいつまでも止らない如く、人間の究理心は進んで止まない。舊くして生命のない個條や權威が、刻々に滅びて行くのは、當然であります。

新時代の青年男女に新しい理想の生まれることは、豊沃な地に百草の芽ぐむのと異なることがありません。

一莖の花が開くのにも、幾多の風雨を凌いで、自然の迫害にうち勝たなければならないでありませう。その間には、目的を果さずに空しく枯死するものが、どれほどあるか知れないのであります。

夢死す　人生の意義を解せず徒にその生涯をおくる。

奇矯　言行の人なみに外れてゐること。

憫殺　甚だしくあはれにおもふこと。

常に、新時代を繼承する青年男女で、苟も自分の與へられた境地を疑はず、また反省せず、あるがまゝに享樂し、夢死するほどのものならいざ知らず、眞理について學びより正しい生活を送らうと考へるものは、今その前に與へられる諸問題、經濟について、道德について、即ち社會人として、また家庭の人として、緊要な問題について眞面目に學び、そして努力することがなかつたなら、その人たちは、新時代の人間としての義務を果すといふことはできません。

この最も眞面目なるべき年代の男女が、過渡期の舊道德が破壞され、新生活上の信仰が確立されない時に際して、奇矯に走り放縱に趨くことは、少しの考のあるものに取つては、憫殺に値するより何ものもないことが感ぜられます。

今田舍の女子は、都會の女子が享樂的に華美に暮してゐることを羨み、都會の女子は、田園に汗水滴らして働いてゐる女子を

無智の如く思ひ、よくその生活に耐へるかを疑ふでありませう。けれども兩者の生活を深く批判的に觀察したならば、どちらも過渡期にあることがわかります。そして、この現狀をいかにしたら不自然から、不健全から救はれるかといふことを考へるものは、やはりかの女等自らでなければならぬといはれるのであります。

改訂
女子新國文巻十終

（一）雪どけの爲に深山一帶がくもつてゐる。さうした天氣模樣におどかされるやうに鳥が鳴く。

（二）出代とは、舊暦二月二日に雇人が年期が滿ちて交代したこと。

附錄

俳句百吟

甲　代表的で、價値のあるもの。

新年

元日や家にゆづりの太刀佩かん　去來（向井氏）

長松が親の名でくる御慶かな　野坡（志田氏）

鳴く猫に赤ン目をして手鞠かな　一茶（小林氏）

藪入の寢るや一人の親のそば　太祇（炭氏）

春

灰捨てて白梅うるむ垣根かな　凡兆（宮城氏）

（一）雪どけや深山ぐもりを鳴く烏　曉臺（加藤氏）

（二）出代や幼ごころにものあはれ　嵐雪（服部氏）

(一)涅槃像とは、釋迦が入滅した時のさまをきざんだ像。

(二)雛のかごをかつぐ人たちよ、その小さなかごを春風にこかすな。

山寺や誰もまゐらぬ涅槃像(一)　樗良（三浦氏）

けふは身を舟子にまかす霞かな　太祇（炭氏）

紫に夜は明けかゝる春の海　几董（高井氏）

市中や馬にかけゆくいかのぼり　凉菟（岩田氏）

春風にこかすな雛の駕籠の衆(二)　荻子（辻氏）

鷄の子の嘴よごしけり春の雨　嵐蘭（松倉氏）

青柳にいよいよ眠る胡蝶かな　維駒（黑柳氏）

永き日や大佛殿の普請聲　李由（河野氏）

春の夕絶えなんとする香をつぐ　蕪村（谷口氏）

瀧壺もひしげと雉子のほろゝかな　去來（向井氏）

夕汐や柳がくれに魚分つ　白雄（加舍氏）

山路來て何やらゆかし菫草　芭蕉（松尾氏）

日は日くれよ夜は夜あけよと鳴く蛙　蕪村（谷口氏）

陽炎やほろほろ落つる岸の砂　土芳（服部氏）

(一)五月雨の關係で琵琶湖がささにごりしてゐる。しめつぽいくもつた空を時鳥が鳴いて過ぎる。

(二)五月雨で大井川は川止め。そこで、この五月雨雲を一時に大井川へ吹落して流してしまへと風に希望したのである。

(三)夜知人が鮎狩の歸りにかど口で鮎を少しくれて、内へは上らずに早早行つてしまつた。

(四)山上には斧の音がして居りながら、その麓の里へ沛然と夕立が來た。

(五)軒のつりしのぶに客がおもしろ半分にちよつと水をやつた。

(六)花ねぶの木か

絲遊の亂れ亂れて靜かなり　闌更（高桑氏）

望湖水惜春

行く春を近江の人と惜しみけり　芭蕉（松尾氏）

夏

時鳥鳴くや湖水のさゝ濁り(一)　丈草（內藤氏）

五月雨の雲吹落せ大井川(二)　芭蕉（松尾氏）

文もなく口上もなしちまき五把　嵐雪（服部氏）

とりにがす隣の聲や行く螢　太祇（炭氏）

鮎くれて寄らで過行く夜半の門(三)　蕪村（谷口氏）

斧の音ふもとの里は夕立す(四)　保吉（藤原氏）

軒のしのぶ客かりそめに水むすぶ(五)　星布女（榎本氏）

曉の草に燃えいるほぐしかな　闌更（高桑氏）

釣りそめて蚊帳の匂や二三日　浪化（無姓）

舟曳の妻の唱歌かねむの花(六)　千那（三上氏）

げに誰か唄をうたつてゐるが、あれは夫の舟を綱曳してゐる妻が、舟の小休みでうたつてゐるのだらう。

(一)沈は沈香のことで、古來香料として名高い。

(二)田圃道で子供がけんくわしてゐる。その背たけほどにもう畑の麥が伸びきつてゐる。

(三)近江の國分山にあつて、芭蕉がしばらく住んだ庵。

(四)「たちよらん蔭と頼みし椎がもと、空しき床となりにけるかも」。（源氏物語椎が本の歌）による。

(五)くしやみが出る。これは冷氣の爲だと秋

順禮の棒ばかり行く夏野かな　重頼（松江氏）

蚊遣木(かやりぎ)にたまたま沈(じん)(一)の匂かな　几董（高井氏）

うき我をさびしがらせよ閑古鳥　芭蕉（松尾氏）

渡りかけて藻の花のぞく流かな　凡兆（宮城氏）

さゞれ蟹足はひのぼる清水かな　芭蕉（松尾氏）

(二)つかみ合ふ子供のたけや麥畑　游刀（姓不明）

幻住庵(三)

(四)まづ頼む椎の木もあり夏木立　芭蕉（松尾氏）

羽蟻とぶや富士の裾野の小家より　蕪村（谷口氏）

月の出る川筋白し水鷄鳴く　召波（黑柳氏）

明石夜泊

たこ壺やはかなき夢を夏の月　芭蕉（松尾氏）

秋

(五)秋來ぬと合點させたるくしやみかな　蕪村（谷口氏）

の來たことを合點させる。「秋來ぬと目にはさやかに見えねども、風の音にぞ驚かれぬる」。（藤原敏行）

(一)名月を眺めてゐると、滿汐のかしらが庵のかど口にまで及んだ。

(二)鯛を見ない山里や、花櫻を見ない片田舍はあらうが、けふの名月を見得ない所はなからう。

越後出雲崎にて

荒海や佐渡に横たふ天の川　芭蕉（松尾氏）

更けゆくや水田の上の天の川　惟(ゐ)然(ねん)（廣瀨氏）

大内の飾をがまん星祭　千(ち)子(ね)（去來妹）

初潮に追はれてのぼる小魚かな　蕪村（谷口氏）

がつくりとぬけそむる齒や秋の風　杉風（杉山氏）

稻妻や海の面をひらめかす　史邦（根津氏）

あくびして月ほめてゐる隣かな　几董（高井氏）

深川芭蕉庵

(一)名月や門(かど)にさしくる潮がしら　芭蕉（松尾氏）

名月や疊の上に松のかげ　其角（寶井氏）

名月を取つてくれろと泣く兒かな　一茶（小林氏）

(二)鯛は花は見ぬ里もありけふの月　西鶴（井原氏）

によつぽりと秋の空なる富士の山　鬼(おに)貫(つら)（上島氏）

荒れ荒れて末は海行く野分かな　猿雖（梁山氏）

薪ともならで朽ちぬる案山子かな　正秀（永田氏）

牛叱る聲にしぎたつ夕べかな　支考（各務氏）

はぜ釣るや水村山郭酒旗の風　嵐雪（服部氏）

霧しぐれ富士を見ぬ日ぞおもしろき　芭蕉（松尾氏）

暮るゝほど芭蕉にひゞく蟲の聲　許六（森川氏）

（一）蛤のふたみに別れ行く秋ぞ　芭蕉（松尾氏）

冬

伊賀山中にて

初時雨猿も小蓑をほしげなり　芭蕉（松尾氏）

（二）こがらしの地にも落さぬ時雨かな　去來（向井氏）

大根引大根で道を教へけり　一茶（小林氏）

わが寢たを首あげて見る寒さかな　來山（小西氏）

禪寺の松の落葉や神無月　凡兆（宮城氏）

（一）蛤のいい伊勢の二見へ諸君と別れて行くのだ、この行く秋の頃にといふので「ふた」に蛤の蓋（貝）をかけ、行くを自身と秋とに通はしてゐる。

（二）強いこがらしが時雨を吹くので、時雨が地へも落ちないくらゐである。

この夕べ誰ぞや落葉にすべる音　勾空（姓不明）

（一）里人の渡りさふらふか橋の霜　宗因（西山氏）

息杖に石の火を見る枯野かな　蕪村（谷口氏）

住みつかぬ旅の心や置火燵　芭蕉（松尾氏）

（二）浦風や巴をくづすむら千鳥　曾良（河合氏）

炭がまに手負の猪の倒れけり　凡兆（宮城氏）

（三）炭賣に鏡見せたる女かな　蕪村（谷口氏）

嫁入の門も過ぎけり鉢たゝき（四）　許六（森川氏）

鷄の片脚づつや冬ごもり　丈草（内藤氏）

炭團法師火桶の穴より窺ひけり　蕪村（谷口氏）

この木戸や錠のさゝれて冬の月　其角（寶井氏）

寒月や我ひとり行く橋の音　太祇（炭氏）

下京や雪つむ上の夜の雨　凡兆（宮城氏）

（五）いねいねと人にいはれつ年の暮　惟然（廣瀨氏）

（一）謡曲景清の「里人の渡り候ふか」といふ語と、温庭筠の「人跡板橋霜」といふ詩句との意による。

（二）強い浦風に吹かれて、むら千鳥がのやうに總くづれになつて亂れてゐる。

（三）顔が炭で黒くよごれてゐる炭賣に、その顔を御覽なさいといつて、女が鏡を見せた。

（四）鉢たゝきとは舊暦十一月十三日から四十八夜の間、空也念佛（空也上人が始めたといふ念佛）の僧がへうたんをたゝき無常の詞を唱へて歩くこと。

（五）居候に入りこんでゐる家の

人から、歳末年始の忙しい時に居られては困るから、いんでくれといはれた。

(一)久しぶりで歸つた故郷で年も暮れようとするをりもをり、生まれた時のへその緒を見せられたので、亡き父母のことが思はれて泣いた。

(一)ふる里や臍の緒に泣く年の暮　芭蕉(松尾氏)

乙　價値は低いが通俗に人氣のあるもの。但しこれ等の中には作者の疑はしいものもある。

これはこれはとばかり花の吉野山　貞室(安原氏)
世の中は三日見ぬ間に櫻かな　蓼太(大島氏)
むつとして戻れば庭に柳かな　蓼太(大島氏)
手に取るなやはり野に置け蓮花草　瓢水(瀧野氏)
さてはあの月が鳴いたか時鳥　藻風(姓不明)
起きて見つ寢て見つ蚊帳の廣さかな　千代(福田氏)
浮草やけさはあちらの岸に咲く　乙由(中川氏)
夕涼よくぞ男に生まれける　其角(寶井氏)
やれうつな蠅が手をする足をする　一茶(小林氏)
いふまいと思へどけふの暑さかな　作者不明
蚊にこまる蚊もまたこまる團扇かな　作者不明

化物の正體見たり枯尾花　也有(横井氏)
ふぐ汁や鯛もあるのに無分別　芭蕉(松尾氏)
わが雪と思へば輕し傘(かさ)の上　其角(寶井氏)
いざさらば雪見にころぶ所まで　芭蕉(松尾氏)
わが子なら供にはやらじ夜の雪　羽紅(凡兆妻)
雪の日やあれも人の子樽ひろひ　冠里(安藤氏)

改訂 女子新國文 卷十 附錄 終

大正十二年十二月十五日訂正再版發行
大正十五年十月一日訂正三版發行
昭和元年十二月二十五日訂正四版印刷
昭和元年十二月二十七日訂正四版發行

改訂 女子新國文 奥附

編者 芳賀矢一
發行者 合資會社冨山房
代表者 坂本嘉治馬
印刷者 冨山房印刷部

著作權所有

檢印 [検 芳賀]

發行所 東京市神田區通神保町九番地
合資會社冨山房
電話神田 二四一・二四二・二四三番
振替口座東京五〇一番

定價

自一卷至四卷	各金四拾貳錢
自五卷至八卷	各金四拾錢
九卷十卷	各金四拾壹錢
昭和三年度臨時定價	
自一卷至四卷	各金七拾錢
自五卷至八卷	各金六拾六錢
九卷十卷	各金六拾八錢

浦野製

中五 園田アキノ